



長谷寺の春

苞固し
 蕾ふくらむ
 咲き始め
 三分咲
 五分咲
 七分咲
 八分咲
 満開
 りょうらんの盛りの花
 散り初め
 落花さかん
 とどめようもなく
 さらさらと花吹雪する
 ひとひらの花は可憐に薄く
 色は清くほのじろい



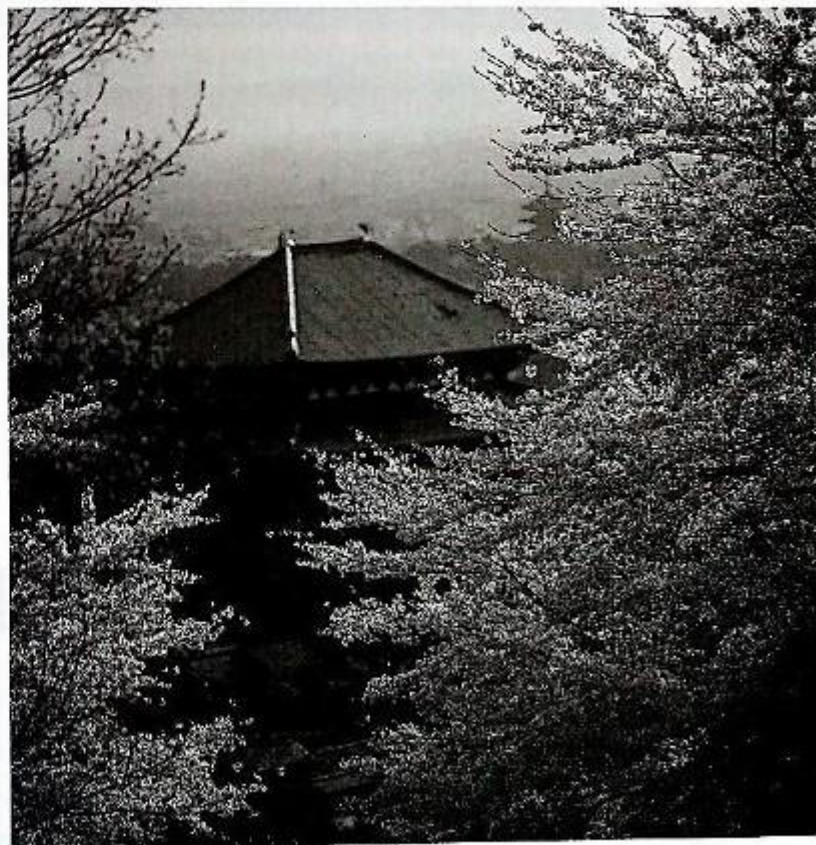
東大寺お水取り (遠くに若草山を望む)

Photo essay

さくら



題字 中田 爾 石
 撮影 由井 永 収
 文 松 永 恵 一



大仏殿と桜 (遠くに興福寺の五重塔を望む)

季節の



スマイレ



サンシュユ



美山町の民家

実景

撮影 武市通治

陽春



お花見(明日香)



山吹



霧の国見峠 (鈴鹿)

伊藤 勤二



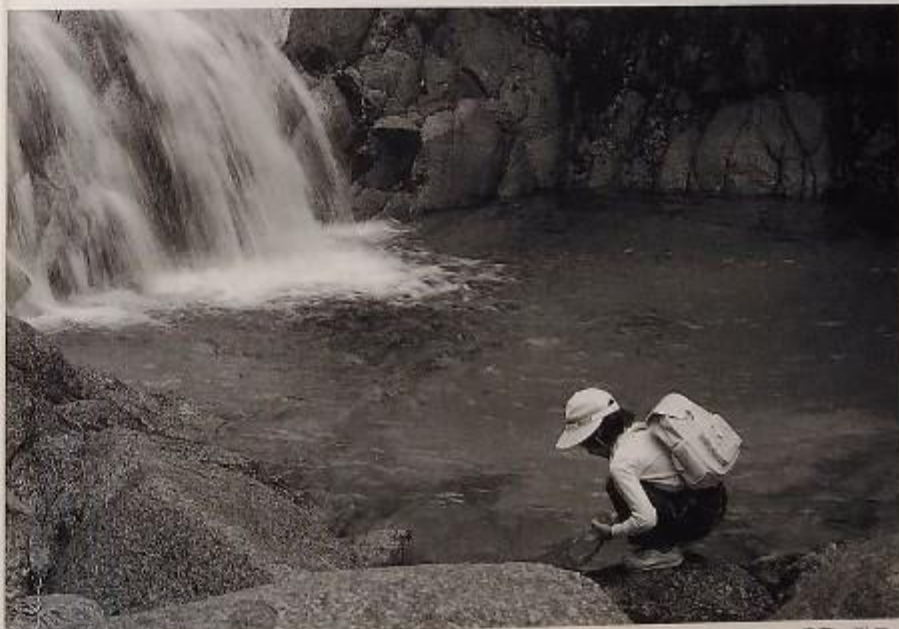
アカヤシオ咲く滝内壁 (鈴鹿)

伊藤 勤二



猿の裏道 (鈴鹿)

伊藤 勤二



鏡ヶ淵 (鈴鹿)

伊藤 勤二



随想 (山のエッセイ)

読しているいろいろなアクシデントに遭遇した。

まずケチのつき始めは一年前の11月、五島列島の一等三角点の山々を訪れたときのことである。徳島島から南下して、中道島の友住の港の民宿に泊まった。翌日は一等三角点のある字久島島に行く予定で、この一帯で五島列島の一等三角点は今期終わりでなあと、宿で九時前後の焼酎をあけて、横断よく床についた。

ところが夜中の午前3時過ぎ頃から、左の腰腹がシクシク痛みだした。少し飲み過ぎたのかなあ、と思っているうちに、痛みはだんだんと激しくなり、七転八倒、とても寝ていられない。宿の人を起こして町の病院に送り込んでもらった。

山崎と痛み止め注射でともかく朝を迎えた。診察の結果、腰腹神経石とのことだ。なるべく早く帰って治療を受けなさいと言われた。幸い薬で抑えられ、それ以後も薬を飲んでいりかぎり痛みをなかつた。

けんさんなもので、痛まないとなると、半月もたたない12月、刈馬、香取へと出発した。勿論登り残した字久島の一等三角点も予定の内である。

香取は切妻で小島港へ、夜行の船で刈馬に上陸。刈馬から香取を渡り、次いでフェリーで九州本土の種子港に渡る。ここから鎌倉の黒磯島に行くべく船を待っていた。

少し時間があつたので、朝市をのぞいてみた。港に突くと船が着いていたので、急いで乗ろうと走った途端、足がもつれてコンクリートの床に倒れ込んだ。

左胸をしたたかに打ち、左手を床についたのだらう人差し指が脱臼して、ブラ下がっている。みるみる指が腫れあがる。しかし馬渡馬行きの便船は少なく、この間に乗れないと、日帰りは不可能になる。

腫れた手を抱えて黒磯島の三角点の山を登る。呼子港に戻り、バス、JRを乗り継いで福岡駅へ、

閉居近の駅クリニクに駆け込んだ。薄長く整形外科がおり、すぐに脱臼は戻してくれた。福岡、宇久島の一等三角点はまだお預けとなった。

年が明けて平成5年7月、初年の如く北熊道へ、30か所ばかりの一等三角点を尋ねたが、道元の道のない2000メートルの民安山で、我儘さしている、突然蜂の攻撃を受け、手を足を数箇所刺されてダウン。しばし目の前が真っ白になり、失神しかけた。

2時間ばかりも眠りの中で寝ていたら、体力が戻ってきたので下山した。しかしまだ少し体がだるいので天原町の病院に行く。医師は膝に裏われて死ぬ人もあるので、すぐ点滴をしようかと、入院させられた。結局小半日もベッドに寝かされた。2、3日は注意が必要、旅行中なら仕方ないが、気分が悪くなればすぐ近くの病院に行くこと、と条件付きで解放された。今では山行に健康保険証を手放さない日々である。

動物によく出会った日

霊仙山

妻と娘と3人で、身体みに雪が残る鈴鹿山脈北部の霊仙山に登った。妻とは年に一回か2回の天気の良い日を選んでの山登りである。

霊仙山は三角点(1084m)の他に鈴鹿山、最高点(1098m)、南麓橋など標高1000mを越す幾つかのピークをもち、山頂部はカルスト地形で、付近にはほとんど雷におわれ、窪地に水を溜めたおとろが池やカレンホルトが一面に広がっている。さらに頂上からは、南には筑紫連山脈の長門郡御油岳、東に広い笠置岳をぼんやりと見ることができ、北には伊吹山、さらに延々と山並みが続き、遠く白山まで遠望できる展望の良い山である。

高雄 潔

鈴鹿

交通の便のよい東海道路の鹿ヶ井駅や柏原駅からの登山道がよく利用される。私たちが東海道路の木原駅で乗り換え、次の鹿ヶ井駅で下車した。駅前から鹿ヶ井行ききのバスが8時2分に出たところで、次は9時15分まで便がないので歩くことにした。駅前の国道の号線の標高を渡り、突き当たりを南に向かう。丹生川の右岸に沿って歩くと、駅から1時間ほどで上田生のバス停につく。橋を右に渡る。遊歩道に行く道であるが、私たちは橋を渡らずそのまま右岸を上流に進む。バス停には商店があるので道の様子を知ることができ

人家が切れると水たまりで道は一段になり左に林道がさらに続くが、まっすぐ延びる橋か

霊仙山山頂付近(鈴鹿山から三角点を望む)



な杉の植林地の道を行く。先に進むと風も少しは冷たくなっていく。丹生川に架かるおしらに橋を在岸に渡り、もう少し歩くと林道も終わる山道になる。この辺りは谷に水がななく伏流水にたっぷっているが、上流には阿ヶ所か水場がある。大きく左にカーブし、えん堤に出るころ谷を隔てた対岸に屏風岩が迫ってくる。岩登りを要しむ入があるようのでハーケンやボルトが幾つか残っているのが見える。

割れた谷筋に沿って登ると、はやしが坂、こもり穴・一の谷・二の谷など細かな道標がつけてある。上丹生のバス停にある店の方が、登山道の整備をされているようである。こもり穴の少し手前で、上部で何の道標があるのか、斜面に沿って上の力に目をやると岩陰に、茶色の毛でふっくらした顔の動物がこちらを凝っている。顔しか見えず、何か狐かともう一人がわいわい言っていて、しばらくお互いを観察していたが、徐々に山上の藪の中に去っていった。体つきは狐のようだった。



春と晩秋はこの谷筋で、猿によく出会う。リスにも幾度か出会ったが、その他の動物は初めてであった。こもり穴は奥行き10分程の狭穴で左岸を登り、右岸に登るところにある。小さい子供が喜びそうな場所である。さきほど登ると、左岸平の西斜面になり植林地に入る。

二の谷を過ぎた所に、「横道」と案内板が用いていた。「横道」は、谷を離れて横が横コースの上部に出て、再び井戸が河で合流している道である。案内板を見たのは今回初めてである。今日は谷沿いの海がコースを登るつもりでいたが面白そうなので、予定を変更して新しい横道コースを登ってみることにした。杉の植林地の木立ちの中すくなく急登になる。案内板の通り30分できついな登りが終わる横道に出た。この急路にはタラの木が多く、あと1か月もしたら新芽も出てきそうだった。登りきると北側の展望が開け、残雪が出てきたのでスパッツを付ける。尾根の北側斜面に沿った道なので、雪が融け足元がぬかるみになっている。勾配はほとんどなく、道は水平になっているので、積雪時にも一度歩いてみるとうと想像。

斜面は植林のため谷側が開放されていて谷山谷と、谷を挟んだ頂上にいる風情から谷にかけての斜面がよく見える。焼つか小さい尾根の頂を回り込んで水平場が続いているのか、途中には階段も焼つか水切ついているのか、残雪の上に足跡が残っている。いつか又カモシカに会えるかも知れない。水平道に出てから30分程で井戸が河に出る。

井戸が河からは再び谷沿いの登りで、四丁・横道までの谷にはまだたくさん雪が残っていた。横道はさきさき雪の上を登ってゆく。雪は後から一足毎に、銀の踏み跡を踏みかきいては「なんで私だけが沈むの」と汗をかきながら登る。谷を結ぶところが四丁・横道。柏原からの登山道でここが合流する。雨に少くとすくに笹の口の登りになり、急登を登りが緩くなってきた頃、遠く小窓に着いた。小窓の東側の山だまりで昼食にした。笹が風に吹かれる音以外は何も聞こえない静かな場所である。遊樂小屋から登山山までは10分程度の登りである。真々降られたルートが少し外すと、笹の中に石灰岩の尖った岩が突き出ていることがあり、足元に気が抜けない。伊吹山が北側に大きく見える。双野からいきなりそびえ立っているの、ひとときわたくし大きく見える。



葛山山三角点山頂へ残雪を踏んで登る

伊吹山の山頂は5月頃にも雪が積って、秋には廻りの山々に先がけて冠雪する。こもり穴から三角点のある頂上までは世の中を少し下り、鞍部から10分程登り直す。今日は雪道を外し、左下方に傾10分ほどの頂上に続く残雪の上をまっすぐに登る。少しの登りであるが、足跡のない雪の上を歩くのはなんとも仕度ない気分になる。

三角点の頂上は渡るものがないので風当たりが強い。晩秋から冬季にかけては、思いのほか風の強い日もあり防寒対策が必要だ。頂上付近は地形が単純なこともあり、雪が積もると現在位置を見失うこともある。特にガスなどの出た直後の日には、地形を掴めないよう慎重に行動する必要がある。頂上からの下りは、三角点と葛山山の鞍部まで戻り、また谷筋に降る雪の上を辿って下り、おとらが池付近で雪道に戻る。雪の多い年には、おとらが池は雪が厚く、雪の下には何もあらず。おとらが池は葛山湖の風情がきらきらと輝き、湖畔には比良山系が横たわっている。遊歩は水と山の国だと実感できる。「ここからは雪道のぬかるんだ道を下る。汗かき解までくると、裾ヶ畑の小窓までですぐだ。裾ヶ畑の小窓は雪道に連続すれば今も宿泊可能なのだろう。20数年前に一度泊まったことがあるが、夜、ランプの下での食事と、小屋から出た時、目を開けているのに自分の指先が見えない瞬間は、一歩も足が踏みだせなかったことに不思議な感覚を覚えたことが記憶にある。また今は残っていないが、庵村になった当時はまだ庵とか、小屋も残つか残っていて感跡に一度寝たことがある。ここでは庵屋に入の空気が残っているような気がして、風の音

と破れた戸の影が怖く、明るくなるまで寝袋から外に出られなかった。その後おとらが池の登山が多くそんな思いはないが、町のすぐ近くにある場所とは思えないおとらが池の場所である。今は小屋を守っている人も代替わりしているが、いつかまた機会をつくり、泊まってみようと思う。小窓の前を流れる沢で水筒に水を満たす。大きな杉の木の間を沢に沿って5分ほど下ると林道に出る。

遊樂場に着くまで、林道の道端に伸びている藪を踏みながら下っている。再び遊樂場の近くの林の中で何匹かの猿に出会った。今日は動物に2回も会った。山の中に餌が少なくなってきたのかもしれない。遊樂場からはバスで鞍ヶ井駅に出た。

平成5年3月27日歩く

高時川流域の静かな峰

妙理山

琵琶湖の北に位置する山々を、湖北の山と呼んでいる。特に蘆洲を築定できる程独立した山塊ではないが、奥美濃の山へ徐々に高度を上げながら、延々と続いている。私の単純な旅行者的感覚から言えば、琵琶湖に流れ込む姉川の上游の高時川流域が、最も湖北の山の風情を色濃く残している所のように思う。

大船尺の地図を広げると、長円形の滋賀県の北端が少し出張しているのが分かる。それが高時川流域に相当する所である。織原は丹後半島とはほぼ同じで、京都に住んでいる者からすれば、すいぶん北国という印象を持つ。そして、周囲が開放的な海ではなくて、1000以上の山々に取り囲まれている山里である。冬ともなれば晴れ間の少ない曇灰の村

松田敏男

湖北

という印象は、山を巨指する者にとっては、非常に魅力的な地域なのだ。

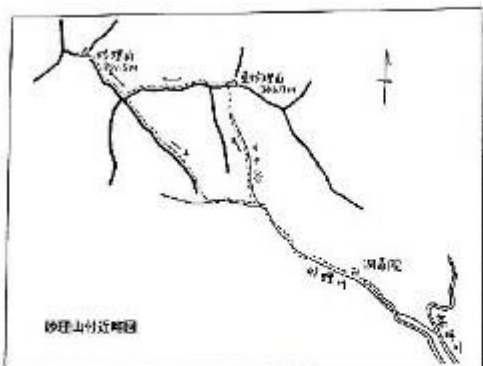
周りの山々は麓間(蘆井奥地)が美濃(岐阜)との境であり、その中心的位置に坐するのが、三つの山を分かつ三箇ヶ岳ということになる。1200以上の高度だ。しかし近江の国(滋賀県)にすっぽりと入っている山の中ではたまたひとつ、標高が1132メートルの高度をもつて大きく尾根を張り巡らせている。この山こそ湖北の山の代表格と云っていいだろう。その北の、高時川流域の最も奥まった所の西側に妙理山、その奥に大黒山、東側に安珠山が、いずれも標高900以上の高さで房並んでいる。大黒山系という言い方を何かで聞いたことがあるので、この地域の代

東妙理山より妙理山を望む



表登は大黒山なのだろうか。三山のうち妙理山だけが、地形図に正確に描かれていない。しかし地形図から判断すれば、妙理山は東へ長く尾根を派生させて、もうひとつの三角点の東妙理山をおこして、大黒山や安珠山より大きな根張りを持っていることが分かる。

これは高時川流域にある三つの900以上の山は、すべて残雪期に登った。残雪期は、登山道がない山に登るには恰好の時期で、毎年



3月頃は休日がいくらあっても足りないくらい忙しく、登山期期と云えようか。真冬とは違い、日が照ると充分に暖かくなり、昼の寒さには余裕ができ、ゆっくりとした山行が楽しめる。雪は適量に止まっていて、深くラッセルすることもなく快適に登られる。スパッツをつけ、ストック片手の雪山は、高山に登るのに似た楽しさがある。

しかし湖北の山の冬から残雪期にかけて

は、晴れる日がすいぶん少ないと思われる。

これまでの山行から、鉛色の雲に濃霧か雪というイメージが強く残っていました。三つの山の中で最近登ったのは、一昨年の2月の安珠山である。田戸という集落からの取りつきが、ものすごく急な山だった。予想していたより雪の量が大幅に少なかった。その日は2月というのに、いつ雨が降り出すか分からない天候で、田戸の人に山の状況を聞いた時、よくこんな日に登るねえという感じだった。湖北その日の天候を、前日京都にて判断するのはなかなかむずかしく、木之本あたりまで来て、ああそうだったのかということが多いのである。安珠山の頂上に着いた時は、小雨まじりの深い霧で幻想的な森の光景が広がっていた。6人のメンバー全員が入りきれないくらいだったが、ツェルトを雨よけにして食事をした。レギュラーコーヒーもたてて、ゆっくり山を味わう静かなひととき。どしゃぶりになり、あわてて荷物をもめて逃げた。霧が消えた森のような山は、魅力的な表情を失い、大雨に追われるばかりの下山になった。

92年の3月には大黒山に登った。登山道が西側の橋板峠からあるので、これを利用して往復した。だから大黒山は高時川流域の山と

九州百名山に登ろう!

(大阪発着で行く九州の名峰)

■屋久島・宮之浦岳登頂と種子島観光
3月18日(土)～21日(祝) 大阪発着 125,000円
送迎車同行(食事:朝2・昼2・夕2付)

■屋久島・宮之浦岳登頂と縄文杉
3月18日(土)～21日(祝) 大阪発着 105,000円
送迎車同行(食事:朝2・昼2・夕2付)

■日本屋久島 最良峰 石尾島於茂岳と神鷹山表登
3月11日(金)～13日(日) 大阪発着 137,000円
送迎車同行(食事:朝2・昼2・夕2付)

■霧島・檜島岳から高千穂峰へ縦走と阿蘇岳登頂
3月19日(土)～21日(祝) 大阪発着 109,000円
送迎車同行(食事:朝2・昼2・夕2付)
*車にもたくさん乗ります。送迎料はご遠慮下さい。(無料)



アミューストラヘル株式会社
区内〒911 東郷355番一 電話(092)555-1913号
福岡市博多区博多駅前2-5-26
博多備成ビル10F 〒812
☎(092)414-5566
FAX (092)414-9543

山と高原地図シリーズ

定価 各700円(税別)

- | | |
|--------------|-------------|
| 1 北アルプス地図 | 34 飯綱山 |
| 2 白馬群 | 35 妙日・出羽三山 |
| 3 磐梯群・奥日光 | 36 奥日光 |
| 4 駒・立山 | 37 富士・奥日光 |
| 5 上高地・槍ヶ岳 | 38 奥日光・奥日光 |
| 6 奥日光 | 39 八ヶ岳 |
| 7 奥日光 | 40 十和田湖・奥日光 |
| 8 中央・南アルプス地図 | 41 ニセコ・羊蹄山 |
| 9 不肖峰・高木岳 | 42 大雪山・十勝岳 |
| 10 甲斐群・北岳 | 43 白山 |
| 11 越後・赤石・奥越 | 44 奥山・伊吹・奥越 |
| 12 妙高・中越 | 45 奥山・伊吹・奥越 |
| 13 奥日光群・伊達 | 46 比叟山系 |
| 14 磐梯山系 | 47 奥日光山1 |
| 15 西上州・妙高 | 48 奥日光山2 |
| 16 奥日光・霧ヶ峰 | 49 奥日光山 |
| 17 八ヶ岳・奥日光 | 50 北岳の山々 |
| 18 富士・奥日光 | 51 六甲・奥日光 |
| 19 奥日光 | 52 奥日光・二上山 |
| 20 伊豆 | 53 奥日光・奥日光 |
| 21 丹波 | 54 奥日光 |
| 22 奥日光・奥日光 | 55 奥日光 |
| 23 奥日光 | 56 奥日光 |
| 24 奥日光 | 57 奥日光 |
| 25 奥日光 | 58 奥日光 |
| 26 奥日光 | 59 奥日光 |
| 27 奥日光 | 60 奥日光 |
| 28 奥日光 | 61 奥日光 |
| 29 奥日光 | 62 奥日光 |
| 30 奥日光 | 63 奥日光 |
| 31 奥日光 | 64 奥日光 |
| 32 奥日光 | 65 奥日光 |
| 33 奥日光 | 66 奥日光 |

● 昭文社の「山と高原地図」は、毎年最新版として約30冊発行されます。この山の情報は、最新の情報を提供させていただきます。この山の情報は、最新の情報を提供させていただきます。この山の情報は、最新の情報を提供させていただきます。

昭文社

本社 東京都千代田区九段北4-2-11 電話03(3202)2141(代) 〒102
支社 大阪府大阪市東区中津6-11-23 電話06(303)5721(代) 〒532
営業所 札幌・仙台・新潟・東京・大阪・福岡



が見え、その上には将兵や山小屋が見えている。穂高岳山荘から今夜の泊まり、湖沢ヒュッテに向かう。ザイテングラードの狭い尾根を下り、広い湖沢のカルドール・デーンを渡り、湖沢ヒュッテに着く頃には、すっかり日も暮れ途中から補中電灯をたよりの歩行となった。3日目は快晴、湖沢沿いの登山道を下って湖沢で昼食。この夜は上高地に泊まった。4日目は中絶、穂高岳へ寄り、秋夜に始まり始めた中を中絶へ下った。穂高岳へは、穂高・湖沢・穂高山荘のコースをたどれば、2泊3日でゆっくり登れる。

- （参考タイム）
- 1日目 上高地13・00 湖沢ヒュッテ16・05
 - 2日目 湖沢ヒュッテ6・30 白馬平9・40 紀伊平10・45 前穂高山11・05 15・05
 - 3日目 紀伊平11・05 12・05 前穂高山12・05 13・05 穂高山12・05 13・05 湖沢ヒュッテ18・30
 - 4日目 湖沢ヒュッテ7・30 一本木橋9・20 穂高10・45 12・10 穂高山12・50 13・10 湖沢池14・15 15・05 上高地16・00
- 地形図 2万5千—上高地・穂高山荘



白出沢紫雲山分岐より見るジャンダルム

テに泊まった。湖沢は高登りであったが、まわりの山々がよく見えた。湖沢にヒュッテを6時30分に出発した。私は別代後半の頃、直太郎新道を上下した。もちろん湖沢ヒュッテはなく、湖沢に天守を張って豊田明神堂を登った。ある時私たちは、前穂高岳近くで遭難した白男女を担いで上高地へ下ろしたことがあった。

山頂から北へ向かって岩稜を下ってゆくと左手にジャンダルムが見える。前方に北穂高岳を見て進むと足下に穂高山荘が見えてくる。岩の急斜面をくりくりをたよりに下って、穂高山荘の前に出る。眼下に湖沢のカルドール山頂に立っている。奥穂高といっても、岩石の道沿いに立った地点に、棒状一本打ち込んであるだけのことであった」とそっけない記述を残している。

野外活動に伴う危険と対策

坂井 久光

昔になると草木も芽吹き、それにつれ虫類が発生する。蛇や蜂については以前に記したが、その他にダニ・ヒル・ツツガムシ・ブヨ・アブ等がある。

ダニはブツシロに多く、先ダニ後ヒルの言葉があり、先頭を歩く者が特によくつく。これは殺虫剤をふりかけるのが効果的である。ヒルは雨後、又は雪の日の杉林に特に多く、落ち葉の中にひそみ、足下から靴の中に入り込み吸血する。予防薬としては足に塩をふっておき、吸いついたヒルはタバコの火で焼き落とす。

ブヨは湿地帯で大量発生する。嫌なもので、網マスクをかぶるのがよい。殺虫剤も効果がある。

ツツガムシ(恙虫)は幼虫の中に柄原体リケツチアを保有しているものがあり、刺されるとツツガムシ病になる。接診の「忌薬」を塗るとよい。万が一ダニに咬まれた後、体の不調があれば速やかに医者への診断を受けることが肝要である。

野外塾

●バードウォッチング

関西アウトドアスクール
校長 二名良日



親子バードウォッチング
は、清流の裏山、
の通りヒスイ
の青緑色をし
たカワセミ
が、長いクチ
バシを尖らせ
て魚を狙って
もつと狭い

聞きながし、全国的に発信されています。地元関西での聞きながしも盛かめてから、各人それぞれ自分流のユニークな「聞きながし」を比べあうのも面白いでしょう。

山小屋やテントのまわりの森では、夜、〈森の神様〉と呼ばれているフクロウの鳴き声がしじまに響いて、山の安らぎの時間を演出してくれます。ホウホウと鳴くのはアオバズクで、その名の通り、新緑の頃に日本へ帰ってきます。日没直後によく鳴きます。ひきつけたり、ようにフックホックと鳴くのがフクロウでこれは留鳥、三月にはつがいになって卵を抱きます。

沢筋を低く飛び抜けるのは、松ぼっくりのようにスングリムツクリしたミソサザイ。苔を壁に巣作りになじりなっています。

崖辺では、風情に賞讃があり、肌色のクチバシを持ったカワラヒワのカップルが、霧の降りかかっています。

明るい野原の雑木の枝先には、頬の黒帯と、「一筆書き」仕儀の聞きながしで知られるオシロが、暮き時を歌を繰り返しています。

田畑の上空では、暮の暗れた日が大好きなヒバリが歌い、地上にはタヒバリの群れが、陽目もふらずに距離をついばんでいます。

水田の手すを林間の草むらには、国鳥のキジが羽をたいて卵を産んでいます。

暮の山野は、まさに野鳥たちの天国です。バードウォッチングという、自然保護団体の主催する探鳥会に参加し、カメラ、双眼鏡などを駆使し、半音、データを取ると、いろいろなイメージが強いようでも、山行やハイキング、ふだんの散歩など、折にふれてのマイペース、マイナーマでの自然なふれあいが、これからは注目をされてくると思われています。

〈鳥たちの棲む世界〉としての山野を再発見し、いちばん身近な美しい仲間としてのおつきあいを、始めてみてくださいます。

ほこり心で心のなごむ開きの山行……。うっすらと透んでくる空を感じながら腰をおろすと、森のたなびく谷間いっばいに羽するウグイスのコーラスが聞こえます。

土手から奥む百原や水辺、山の池の水面には、今にも飛び立ちそうな毛など渡り鳥たちの影が、また見られます。

四月に入ると、北へ帰る冬鳥と入れ違いに、夏鳥たちがやってくる。陽光が透り、春たけなわになると、鶯やうさぎ、青雉などで鳥たちの動きが活発になるため、鳥を見つけてやすくなるのもこの時期の特徴です。

暮の葦山などでは、ヤブツバキの蜜を吸うウグイスやメジロが盛んに往き来しています。鶯の色のハダな方が、実はメジロです。ウグイスのチエツチエツと鳴くのは「地鳴き」(「鳴き」で、「鶯の谷渡り」といわれるウグイスは、鶯の谷渡り)といわれるウグイスの山行の情緒を感じているものが、夜々が響きかかると、群れ集い、夜渡りの準備にとりかかっています。

低木林では、スズメよりちよっと小さい、冠羽のあるカシラガカの群れが見られます。誰の顔や姿は黒くなり、白い眉線が目立っています。

雑木林には、木の葉を求めてレンジャクが群れています。ヤドリギのオレンジ色の葉が大好物で、その種をお尻から放珠つなぎに垂らして枝にとまっています姿も可愛いです。

冠羽が立ち、風をさらってスングリと膨らんだ姿は、まるで荷物や白い行儀いヒモでしよっているようです。短く平らな尾先が黄色のがキレンジャク、赤色がヒレンジャクです。

針葉樹林の中で、枯木をトルトルと突つくキツツキのドラミングもよく聞かれます。一般的なもの、小さなくげ茶の体の背翼に白い横シマ模様が入ったコゲラです。クチバシから白と黒にかけて青や赤の斑が目立つアオゲラやアカゲラは少し大型で、メスは後頭部、オスは頬頂部に同色の毛が生えています。

落葉広葉樹林の下の方で、チロビチロビと声を張り上げているのは、セングタイムシキイです。歌は「一重の音」に出まわると「千代音」を繰り返しているように聞きなせることから、その名が付いたと言われ、この他にも「焼酎一杯クイ」とか様々なユニークな

アウトドア・野外塾の「案内」

各回でふれましたアウトドアスクールが始まります。多数ご参加下さい。

3月「アライフラーリース作り」
山道や高木を抜けた先で草花を採りながらの作り方を体験。

期日 3月13日(日) 9時
集合 南海岸和田駅改札口 9時
場所 岸和田駅一塔原一和泉宮城野原一牛蒡山一岸和田駅

会費 2,000円(交通費は別途各自負担)
担当 二名良日 ○蔵村たま子

4月「グリーンランドベンチャー植物観察」
大塚山のカシ林に暮の樹生を探検し、天狗尾の樹王尊像を拝む。

期日 4月10日(日) 9時
集合 南海泉野駅改札口 9時
場所 泉野駅一犬塚山一大塚山一大塚山一泉野駅

会費 2,000円(交通費は別途各自負担)
担当 二名良日 ○吉川裕子

(申し込み、問い合わせ) 3日前まで
〒550 大阪市西区本町2の9の11 階
野鳥ビル1301 関西アウトドアスクール
まで 電話06-443-8346
○詳細要項をお送りします。

京、北山独りある記

沢ノ池から京見峠

前中 毅

京都北山

沢ノ池



道けて、異砂門谷をつめる道や、白砂山付近の尾根道などを紹介しているが、私は山城三名瀑のひとつとして名高い、菩提ノ滝を見のがす手はないと、計画の初期からこの林道を歩くことに決めていた。

京都駅からバスで山崎行きに乗り、急坂道で下車し、京都寄りに戻って左の林道に入る。東海自然歩道の道標に従い右へ行く。作業所などの建物の先に中川地区の墓地があり、そこからちよつと上がった道幅の広い所で身支度のチェックをし、軽く準備運動をする。一時ジャスト、菩提の滝を口指す。いつの間にかめつかり弾くなった膝をさしを浴びて、池ノ谷の右岸を緩やかに登って行く。この地帯は北山杉の本場で、谷を挟んで両側の山は

すべて杉の植林だ。鋸型の杉で構成された山は、造林技術と評価されている。そんな森林のあちこちに、痛々しいことだ、折れたのや倒れたのが目立つ。一か月前の大雪の爪跡が、道の前方に、左右から大きな岩がおおいかぶさるように出っばつていて、岩の手前からお右へ急な細いジグザグ道があり、慎重に池ノ谷に降り立つ。左上から流が落ちてくるが正面から見たいので左岸へ渉る。

「花鳥風月という言葉がありますが、もともと日本文化は自然と共存していくことで成立したものです。中でも京都は自然を友としながらも典雅な文化を育ててきた所です。」これは京都府知事がある対談で発言された一部だが、その言葉のように京都の周辺には、昔から人々の生活と密接に関わり合ってきた里山がたくさんある。それらは背に低くとも緑と水が豊かで鳥も多し。今日訪れる沢ノ池や沢山などは、その代表的な山域だ。

沢ノ池へは北区や右京区から幾つものハイキングコースがあるが、今日は菩提ノ滝・池ノ谷の池ノ谷を歩く。このコースは沢ノ池の近くまで東海自然歩道で、大半が舗装された林道だ。ガイマブツクによってはその舗装林道を

菩提ノ滝は想像していたよりもずっと雄大な水量を勢いよく流すへたたまつていて、ほぼ90度の傾斜で、並のような滝壺や整った半円形の崖など、透明の周囲とほどよく調和している。流の左側の崖の隙には、不動明王が祀られている。いわゆる洗神された滝だ。滝壺の崖色の砂が直直で、北山杉を、磨き丸太、に仕上げる工程で、最も重要な磨きの作業だ。この砂を使うのが最良だとされている。谷水とこの砂で一本ずつ丹精をこめて磨き上げられた磨き丸太は、床柱などの高級建築材として全国に出荷されている。

ベストポジションから写真を撮り、出発。



沢ノ池・京見峠付近略図

本格的な登り道になつてきた。うっすらと汗ばんでくる。パークを脱いで峠裏にする。林道終点の分岐は右をとって沢ノ池方面へ。橋を渡って地道をやや下り気味に歩く。左の山裾に上ノ水時への山道が延びているが、直進の広い方を道なりに進む。グラウンドのような広場に出たが、山を制した土取り場のように、その奥に大きな池が見えてきた。

沢ノ池は江戸時代に宇多野方面の田畑への灌漑用として造られたもので、水源は周囲の山からの谷水だ。貯水池としての使命を終えた今の姿は、人工的なものは全く存在せず、天然の池そのものようだ。

コースは池の東側の土手を直行しているが、水辺が歩けそうなので池に降りる。一周できると思うが、とりあえず南東の隅まで行ってみる。ゆっくり歩いて予定地に着き、ザックを下ろす。ここで休憩はあまりにはどだ。池の水は鮮やかな青より少しグリーンに近く、小石を投げ入れたらかなりの深さまでゆらぎながら沈んでいった。吸い込まれそうになるほど神秘的だ。風が出てきてさざ波が水面を移動する。池に写った山の姿がいびつになり、やがてかき消された。

「山の淋しい湖に一人来たのも……」歌謡曲の名曲「湖畔の道」を思い起すが、

輸入ブーツは中狭く、甲低く、カントも無く、その上土馴染みのアークが高返るもので0.5割程度の日本人には合いくいものです。高いばかりか、時にはヒザ、腰のトラブルの原因にもなります。アンドウならばすべてが安心！汗疹の反応はヨーロッパ製を使用していますので、防水性、耐久性、復元力も抜群、しかもうれしい程さ。血塗山靴からウォーキングブーツまでフルラインアップ。問屋では当店のみの特典販売です。是非一度お試し下さい。

登山靴ならアンドウです



- ①①カームネスDX ¥30,000
- ②②#1430 ¥30,000
- ③③#25006 ¥39,000
- ④④FOX ¥29,000
- ⑤⑤#7504 ¥26,000
- ⑥⑥ネットスタッフ ¥27,000

山とスキーの
ヨシミスポーツ
〒613 大阪府天王寺区南河堀4-70
TEL06(772)7231

海を越えて行く山

三嶺から三嶺

つるぎさん ふうね(さんれい)

山本久雄



三嶺(さんれい・みうね)と呼ばれる雲鳥嶽と高知県の黒城、剣山の西にある山を、この春知ろうか。標高1893・4層の山である。この山に20年ぶりに登り、安に感動した。三嶺は高知県側では「さんれい」、徳島県側では「みうね」と呼ばれているが、私は「さんれい」のほうが好きである。

登山ルートはいくつかあるが、近畿からのお勧めルートは、剣山からの経路であろう。山原に出るわくわくした気分です。東麓から船の人となる。翌朝、高松、高松、阿波池田、高松とJRを乗り継ぎ、高松からタクシーで約1時間、見の越へ、さらに季節運転のリフトに乗って一気に1700mまで、歩かずにラクテン登山をさめこむ。

広い登山道を1時間で剣山山頂に着く。見晴らしは素晴らしいの一言につきる。まずは懐かしい山々に挨拶をする。遠く三嶺が望め、これからの縦走が楽しみだ。剣山からの縦走時は、ジロウギユウと丸石の鞍部までは整備されていて、履も広く歩きやすい。この丸石の鞍部からすぐ下に見える剣山スパー、林道に車を置き、剣山を往復する人達が結構いるようだ。

鞍部を過ぎるとたんに山道らしくなり、程なく、なんとか使用可能な避難小屋のある丸石に着く。ここからくるおし程度の高さの四国世に覆われたはげしい道を、たんとと進へたどる。今日の泊まりの手定だった伊勢の岩屋の避難小屋に着くが、小屋はまるであは

三嶺を望む



ら家のように荒れていて、置き味が悪い。よほどのことがない限り、使えぬ気にはなれない。仕方ないので約3時間先の白根分岐の避難小屋までがんばることにする。

ここから先、縦走路は高知の練山のトラバースルートとなりヤブっぽくなっていく。覆いかぶさる笹や木の小枝を払いのけながら歩いていくと、大きな岩の下になんと着く。伊勢の岩屋である。この岩から縦走路をはずれ少

し下ると水場がある。また先は近い、水をたっぷり補給しておく。
先程の伊勢の岩屋の避難小屋から石立止分岐までがこの縦走路の最も悪い部分で、笹をこぎ、またわる小枝を払いのけ、上がったリ下がったり、足元も悪くうんざりしてくる。エアリアマップでは、尾根にも道があるこ



とになっているが、とんと自覚たらない。前回来た時もそうだったから多分ないのだろう。こんな状態を次から30分も続けたら、やっとなり立止分岐である。このあたりから同行の2人のおじさん達の足元があまりよくなってきた。今日の目的地の白根分岐小屋までは、まだ2時間はたっぷりかかるはずである。なんとか騙してゆかなければ、ここで登壇するのが、長年の山行であみだした私特製のハッスルドリンクである。この効果まことに素晴らしい。2人は元氣一躍すたすた歩きました。しかし残念なこと30分くらいしかもたない。あたりが暗くなる頃、やっとなり立止分岐。小屋の北側の水場が判らず、南の谷をかなり下りて水を補給する。麓に戻った時は近い、小屋は改良され快適だ。林道からも遠くなく徳島からの登山者が多い。

翌朝、小屋から出ると目の前に登々たる三嶺本峰がどーんと聳えている。実にアルペン的な眺めだ。昨日は晴々たる足元と暖れから、気が留めなかったのだが。
小屋から少しで自給山の分岐点に着く。白雲山を越えて高知側から来る登山者が急に増える。おばさんも子供もおばさんも歩いてる。我々も歩かずには歩かず、急な草つきをよじ登ると三嶺山頂は近い。展望はさうとうと

なし。前回、追々黄日に追われ、四方に広がる崖壁のような尾根に心を残し、フスベ谷から下山したのだが、今回は食料も日も余裕がある。今日は三嶺ヒュッテ「無人」で泊まり、明日は20年ぶりに戻って左西へ行く。12時頃になると、ピークハント、ハイキング組は下山して、我々だけになった。静かだがゆっくりと水場が探っていく。とろとろと時間が過ぎていく。きらく泉が明日の晴天を約束している。

翌朝、少し風は強いが予想どうり素晴らしい青空のもと、山頂を後に西へ歩きました。この尾根道は夢の中を歩いているようだ。足元にはびっしりと四国世が取っつけられ、展望を遮るものはない。北からの強い風にとどめられそうになりながら、西麓山を越える。お泊り避難小屋は立派で、内部にはゴミ一つ落ちていない気持ちのよい小屋である。使用する人の心遣いが感じられる。

荷物をテボし、足の調子の良くない一人を誘い、食料と水を持って4:57・57・1分を日指す。いざり峠にくると大塚家のとんがりピークがかわいい。このピークから道は少し極しくなってくる。踏み跡をはずさぬように注意してたどる。エアリアマップの池のマークの場所は登山道になっていた。この先のピ



ピーク1757.1に付近にて(後方に天狗塚・三嶺を望む)

ークから見ると三嶺も夫に同じで気持ちがいい。金1757・11で小休止。空は五月晴れ、心も軽お世帯遊舞小屋へ戻る。途中、天狗塚のピークで長かった後継の縦走路を眺める。

気持ちのよい散歩もいよいよ終わり、カンカケ谷へ急な下りを足早に下りる。空がどんどんと暗くなってゆく。草原のような後継との別れに諦めもついたころ、小さな谷を渡る。

そこそこ大きなワザセがあり、ハッパをかじりハッパをかけて元気になたただた下るのみ。道は時々寒流がはきになり幾び石伝いとなるが、危険な所を歩かない。三嶺からダイレクトにおりてくるフスベ谷の道と合流するともまもなく、今日の宿まり小屋小原である。が、しかし、たどりついた小原は、足根が無残にも抜け落ち、内陣はぼろぼろのあばら家だった。前泊、ここで泊まった時は床が黒光りしていて、がっしりした遊りに、暑間夕と絶賛した小屋が、こんなにも荒れ果てていたとは、あまりの変わりように拍子抜けして、道のこびりついた床にへたりこんでしまった。そして、改めて20年の時の流れを感慨した。

これではどうしようもない。寝袋とした心を小屋に残して重い腰を上げ、ビバークすべく場所を探しにほとほと歩きだした。小屋から西側川右岸中取をトラバースして久保影へ続く山道も見当たらない。あとで聞くと、この道は崩壊して道通不能になっているという。時の流れとはかくも無情なものか。しかたなく、はつきりとした道を少し行くと、対岸の林道に続いていた。口も登れてきたので、宿帳付きの休憩舎でビバーク。今宵は月も星も見えない、漆黒の闇だ。

翌朝、別れを惜しむかのようにポツリポツリと雨粒が落ちてきた。久保影までは平坦な林道歩きだ。
青ヶ谷、二箇市内観光の後、21時発のフェリー上の人となり船路に寄って、被褥かな蒲戸漕をまくフェリーから暗い空に向かい思いを巡らせる。「さようなら」三嶺縦走の日が今一度その頂に立つ日があるなら、その時も笑顔で迎えてほしい。
平成24年5月28日(5月3日歩)

▲参考タイム▼

- 1日目 リフト乗点(1時間) 剣山(1時間) ジロウギエウ(1時間) 丸石(20分) 丸石(1時間) 伊勢の岩屋(30分) 石立山分岐(2時間) 白雲分岐遊舞小屋(泊)
- 2日目 白雲小屋(2時間) 三嶺(泊)
- 3日目 三嶺(1時間20分) 西嶺山(20分) お世帯遊舞小屋(2時間20分) 天狗塚縦走(2時間30分) 堂津遊舞小屋(30分) 林道休憩舎(泊)
- 4日目 林道休憩舎(1時間30分) 久保影(地形図) 2万5千1剣山・北川久保宿井(印文社)「61四国登山」

室生と奥宇陀の境界尾根を歩く
唐戸山から三郎ヶ岳・袴ヶ岳縦走

酒井賢治

室生

最近、本誌で室生の親路・袴ヶ岳に関する話題がよく取り上げられている。

私も以前、高城山から三郎ヶ岳を縦走した時、伊勢参宮本街道の通る谷を隔ててすぐ間近に立って三角錐の頂を指げる袴ヶ岳と、奥の815肩ピークに繋がる馬蹄形の尾根に魅せられ、この山に登ったことがある。あの時は強欲で、白濁すく西のノゾチ谷に入り深いクマ笹藪を踏み越えしたが、途中から道がなくなり尾根の北側の急傾斜の山肌を縦木に探りながらやっとの事で峻険に這い上がり、三嶺を登って初めて袴ヶ岳頂上を踏み、快報を取らなれた。

この山域の先輩・高田泰久氏も本誌でこの山域の北、東、西面は急な傾

面であるようになっており、南尾根が唯一の登り道だ。また、夏期にはかなりのブッシュになるはずで、登るなら晩秋から早春が適当と懸われる。

今回、本誌が改めて袴ヶ岳への登行の動機を語ってくれたが、伊勢参宮道の飯野と白濁峠からの袴ヶ岳尾根では、私にとって一日の山行としては何か物足りなさを感じた。山の奥深さと高層雲を補充するため、室生時から唐戸山、三郎ヶ岳を縦走し、いったん街道に下り袴ヶ岳に登ることにした。

3月6日午前8時自宅出発。近鉄各線に乗車し、約9時過ぎ藤原駅に着く。高見山や三嶺山への「霧火登山バス」が大勢の登山客を乗せて出発していった。私は9時25分発の19

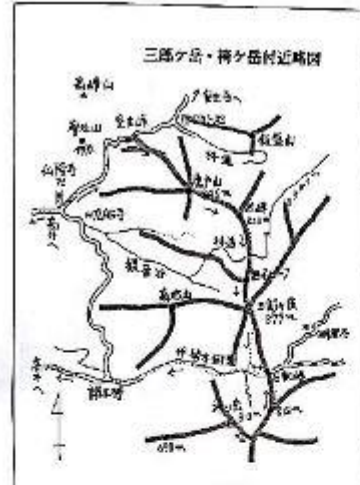
枚のきのバスに乗る。こちらのバスはガラガラで登山客は私以外になし。途中、鞍馬市場を過ぎたあたりで、前面両窓から仰よく並ぶ三郎ヶ岳・袴ヶ岳の三山を見る。9時40分高井で下車。バス停から左へ入り矢谷川にかかる瀬戸橋を渡るとすぐ、伊勢参宮本街道と仏隆寺参道を入り石橋があり、左の幅広い仏隆寺への参道道をゆく。右の山肌に横えられた美しい杉や松の林と田畑が広がるのどかな田園風景を眺めながら進むとやがて夜道となり、古く在る大塔の民家や段々畑を過し、仏隆寺山門の階段を下り行く。

カヤ茸きの立派な四阿に地蔵菩薩が祀られベンチが設けられている。指図標に従い左に仏隆寺や村の公民館をみて室生寺へのコンクリートの参道歩きを始める。左を向き見ると唐戸山が灰色の岩壁を露とし、後ろをふり返ると龍門岳が宮沢山の山塊が美しい山並みを見せていた。小さな流れを横にみて杉林の中の古い道を登ると途中から地道となり、二度ばかり右に大きく巻いて10時30分、小笹の繁を参生峠に越えた。道の正面に役の行者の祠があり、小さな空地に四阿風の休憩所が建っている。

小休憩、時より南へクマ笹藪の山道に入り20分程度進んだところで、テープに導かれて左

へ由がり小さな尾根に取りつく。灌木の繁る小高木の踏み跡を5分ばかり登り、崖戸山から北西方向に張り出した尾根に来る。この尾根は千代郡藤原町と室生町を分ける境界尾根で、後は袴ヶ岳まで続くこの境界尾根を歩くことになる。

登るに従い右の崖側は杉や松の雑林、左の室生側は雑木となりかなり下にカラト池を五回見ると、急な尾根を登りきると、植林から開放され足元にクマ笹繁る雑木の明る尾根道となり、右に三郎ヶ岳から高城山にかけてのシルエツト、左に室生の山々と互に多岐峰地をみる。左右の山肌は標高800前後の山のとは思われない急傾斜で谷に下っている。



尾根は再び急な斜面となり、登りきって11時過ぎ崖戸山に着く。灌木に囲まれたピークで山頂という感覚はあまりない。崖戸山を北西方向に灌木を通して袴ヶ岳・貝ヶ平山などが見える。山頂から北西方向にもう一本踏み跡が下がっている。このピークは注意が必要だ。すぐ次のピーク迷峰へ向けて出発。小さな岩場を下ると今度は室生側が杉や松の植林。崖側が雑木となり緩やかに登り下りながら進む。左の崖側より飯盛山から三郎ヶ岳へ通なる山並みや佐野山・貝ヶ平山などの山線を見ながら、迷峰が近づくと深いクマ笹が行く手を遮るが、笹をかき分け踏み跡を求めて中央に登る。

11時35分、迷峰の平頂の一角に着いた。西面が大きく開け左右近くは高城山と崖戸山、そして遠く袴ヶ山と地や青嵐、初瀬の山々を望む。ここから踏み跡は左(室生側)に直角に折れ、松の植林の山を通り50分程度右に曲がり、薄暗い植林の中を下ってゆく。迷峰は時々のないのっぺりとした平坦地で、ガスなどで境界が利かない時は注意が必要だ。また、この辺り踏み跡というより山仕事の軌道が多く、歩いて、文字通り迷い易い。

いとこた。踏み跡をしっかりと確認しながら緩やかに下ると、一刻して次のピークとの鞍部で、前を急切する林道にとび出た。以前歩いた時、ここは山深い林道の中の鞍部だった。この辺りの山も徐々に林道に侵食されつつある。崖戸山、飯盛山から迷峰へ歩いた時の記憶にもカラト池かららしい林道が上がっていた。林道を越え、まっすぐ向かい側の植林につけられた軌道を緩やかに登ってゆく。伐採された樹木が道を歩きにくい。途中から室生側が雑木、崖側が松の植林になり、クマ笹が足元を埋める境界尾根の道となって、傾斜も急になる。12時10分三郎ヶ岳の一つ北側の黒老のピークに着く。(本誌P18の三郎ヶ岳付近の概要図では平岩山となっていた。昭文社巨版ニアアマップでもそれらしき山名が付いていたと記憶する。山頂から少し下ると東、南、西面が大きく開け、正面は指呼の間に三郎ヶ岳が眺められ、室生や袴ヶ岳・三郎山脈・台高山脈・大峰山脈・駒間山地の山々の大展望が広がった。ただこの展望も南面の松の若木が成長すればなくなるであろう。ここで昼食にする。

12時30分、無名ピーク出発。明るい切り開きを下るとすぐ分岐があり、松の林に沿って右へ下る。左へ下るとハイタテ川源流の谷に

下るの注意を要す。少して植林の中の鞍部に着くと、ここは細音谷の源流だ。ここから杉の疎林の三郎ヶ岳北側の急峻配の山肌を登り返し、12時45分頃三郎ヶ岳頂上に着いた。灌木が繁り東面が僅かに開けるのみ、先程の無名ピークの展望とは違った。しかし、この山域の野山だけと流石に山頂らしい寒気が



三郎ヶ岳(左)と三郎ヶ岳(右)の山頂より三郎ヶ岳への展望

ある。すぐ南へ明開寺への急な坂道を雑木を踏みながら下る。傾斜が緩くなった頃、左上上部に日蓮上人を浮彫りする岩壁を伴って、明開寺奥の院の小屋前に下り着く。ここから左へ下れば明開寺に出るが、今日は小屋の南から直接歩道街道へ下る植林の中の道に入る。強い松林の中の海苔した道を駆け下り、左に細流を見とすぐ土街道に出た。左へ折れれば袴ヶ岳と、ソコ谷への踏み跡が右に細々とついで急峻な傾斜が、石割峠へ足を向けて5分程度薄暗い林の中の峠に着く。峠から西へ杉林の山肌に取りつき登ると、やがて尾根らしくなり笹にかくれた踏み跡を笹をかき分け行く。登るにつれて右は植林、左は雑木の斜面が谷に下る。約15分の急登で漸く大黒の木に黄色のテープが付けられている。鞍部を右へゆきすぐと15分ほどピークに着いた。大黒切心山の余のプレートが木に括弧されている。灌木と植林が交互する稜線を笹をかき分け進む。小さな岩場を踏み緩やかに上下する薄暗い植林の斜面を、少し登ったところに大きな松の木があり、ここから右へ袴ヶ岳への踏み跡が分れる。右へ少し下ると北側に展望が開け、今通してきた815mのピークと袴ヶ岳が両側を挟むように見え、V字の谷の向こうに三郎ヶ岳から高城山の稜線が厚雲状に横切っていた。左右が急峻な谷に落ち込む七尾根を、袴ヶ岳を目標にしながら忠実に進む。やがて踏み跡は右に曲がり、松の木や馬酔木が多い雑木の尾根を登り、小さな露岩を踏み13時45分

袴ヶ岳の頂上に着いた。4等三角点の標石が埋まる狭いが滑らかな山頂だ。北面は松や雑木に遮られるが、地は柔らかな傾斜だ。東から西へ佐野山・古光山・袴ヶ岳・栗ノ木岳・三郎山・高見山・直見山・駒ヶ岳・白屋岳、そして長大な大峰山脈・高野の山々・龍門山脈と数峰にいとまのない展望が広がる。袴ヶ岳の北、東、西面は人を寄せつけない急峻な斜面が谷に落ち込んでおり、ここに築城すれば難攻不落の城が出来たのでは……などと空想した。

14時過ぎ、袴ヶ岳山頂出発。登ってきた踏み跡を忠実に下る。40分程度で右側院に下山。ここから西へ明木野を登って袴井に出る。伊勢参宮本街道を右に左に探検を見下る。明木野の集落の手前で後を振り返ると、厚植林に鈍った袴ヶ岳が深い植林の向こうに頭を見せていた。(平成5年3月6日歩く)

- ヘコースタイム▼
- 高井 (30分) 佐野寺 (30分) 室生峠 (30分)
 - 崖戸山 (30分) 迷峰 (30分) 無名ピーク (15分)
 - 三郎ヶ岳 (1時間10分) 袴ヶ岳 (40分)
 - 石割峠 (1時間) 高井
- 〔地形図〕 2万5千 大和・大野・高見山
 〔昭文社〕 「昭文社・伊勢参宮本街道」

野の花讃歌 (2)

市川 正次郎

早春の花を訪ねて



春一番の花 フクジュソウやユキフリスソウ、セツブンソウなどが咲いていると聞いて、昨年の早春は鈴鹿の山にこだわってみました。

まずアタックしたのは3月中旬の霧原岳。数年来の観望で、七ヶ目付近まで寄れば皆焼、花はなし。頂上附近の小室の手前まで来て、やっと咲いていました。あの真っ黄色なフクジュソウの花が……

喜び勇んで、花の養生えに気遣いながら写真を通っている。「ことしは少ないなあ、いつもなら斜面が黄色いっぱいになるのに」と後から登ってこられた中牛のご夫婦。でも私たちににとっては、たとえ数輪でも、冷たい風にさらされた雪を分けて養生え、花を映かせて

た鮮やかな黄色に大いに感動したものです。

そしてエテラルートでの下山道。薄暗い雑木林の中で、「あれ何？」と先を行く花に目のないメンバーのひとり。駆け寄ってみると、温かい多量の枯れ葉の重なりの中に、それはひとりと頼りなげな草の上に白い小さな花を咲かせたユキワリソウ。緑色した草心と小さなしべが実にかわいいのです。少し下るとセツブンソウ、セリバオウレン、ミスミソウ、さらに固形種のスズカカンアオイも。

その約半月後の4月初め、電ヶ岳へ行きました。夏など大にさわいの宇賀原キャンプ場から登下山、セリバオウレン、コシノコバイモ、ミヤマカタバミ、そして早咲きのショウジョウバカマにも出会いました。さすが花の道師、季節ごとに訪ねてみた山に加わりました。

花の尾根道を行く



セツブンソウ

5月の連休、前夜一泊で霧原・福井県境の三國岳へ登りました。私たちがのメンバーのひとり白さんが、職場のやはり花好き

※前号、ユキワリソウとした写真は正しくはユキワリソウでした。

な友人から仕入れた情報「霧原にはイワウチツが満開」と聞いて出かけました。「もうひと月もするとスキー場の斜面にサユリが咲きます。でも以前よりは少なくなりましたけど」と民謡の奥さん。

さて霧原、スキー場の斜面からどんどん両腹を極ぎ、薬師越への最後の直登へ。あんなあんな雪の斜面にありました。イワウチツの群生がそこに。淡いピンクの小さな花が、濃厚な濃い緑の葉っぱの上で、わずかな風にフルフル揺れていました。

その花に励まされ、やつとの思いで尾根道へ。まるで散歩道のようななだらかな尾根道には、カタクリ、オオバキスミ、ショウジョウバカマが満開、近く遠くの山の斜面にはタムシバが真っ白く鮮やかでした。

やがて昔もなく三國岳の山頂へ。眼下には奥霧原湖から余勢の湖が、その向こうには伊吹山の秀麗な姿が霧霞の中にぼんやりと浮かんでいました。

たまたま登ってこられた東京から来たという六十歳近い単独者の男性いわく、「関東近郊の山には味わいがない、その点、近畿の山は低山でも奥深い」と。その男性とは白谷への下り道で再び出会い、谷筋で納んだというタラの芽をいっぱいいただきました。

京都北山 やぶ漕ぎ痛快山行記 (14)

たじろ 田尻尾根から

あまひ みね 朝日峰・峰山縦走

京都北山グループ

京都駅からバス山行に東出、馬山街道(15)と馬山小野下町バス停で降りる。

今日の例年参加者が降りたあと、カウツがで身軽になったバスは野村へと進んでいく。少し京都寄りになり、右側の水谷川林道の入り口、清滝川の橋を渡り小野小字交差点前ののんびりリゾートのあいさつとコース説明のあと出発となる。

水谷川林道は王子製紙(王子林業)が昭和初期に紙原料の雑木類を採出に造った林道で、現在は中川、小野の林業組合が管理している。海津林道・清滝林道とか、さらに林業道が複雑に絡んで各林道の行き詰まり(終点)が

は、昭文社の地形図「京都北山1」にも国土院の2万5千にも正確に記されている。

田尻峠には現在、峠下の谷の分岐まで雑木道が延び、表登山にはさらに奥のタカノス山の尾根下まで延びると聞く。今日の例年は華園な林道歩きで田尻峠をとるより、バリエーションコースで田尻尾根にとつさんのアザを待て、水谷川水谷川渡渉帯ののびる林道を進む。

今日は杉林帯も京都北山地区は一つで気にならず、晴天の青空、清滝の空気が、鳥の鳴き声を聞きながらの林道歩きは楽しい。左側が大きく降りた谷となり、雑木林道の分岐に響く。朝日峰から延びる支尾根が広がる

田尻峠



明るい林道。今日山道歩きはゆっくりコースと、ここで小休止する。梅谷の道をつめると松尾峠から峰山への横線に乗り、今日は田尻峠の西のP6R2の谷の谷に乗りこえ、谷の西にあるP6R3の谷の谷をよく見上げて出発する。

しばらく進むと右へカーブの所に左、水谷川に新しい橋が架かり、小型ブルも渡れる様がある。P6R3の谷の谷には方角的に近い

熊野古道を歩く

中辺路 (潮見峠から近路・熊野本宮大社)

児嶋 弘幸



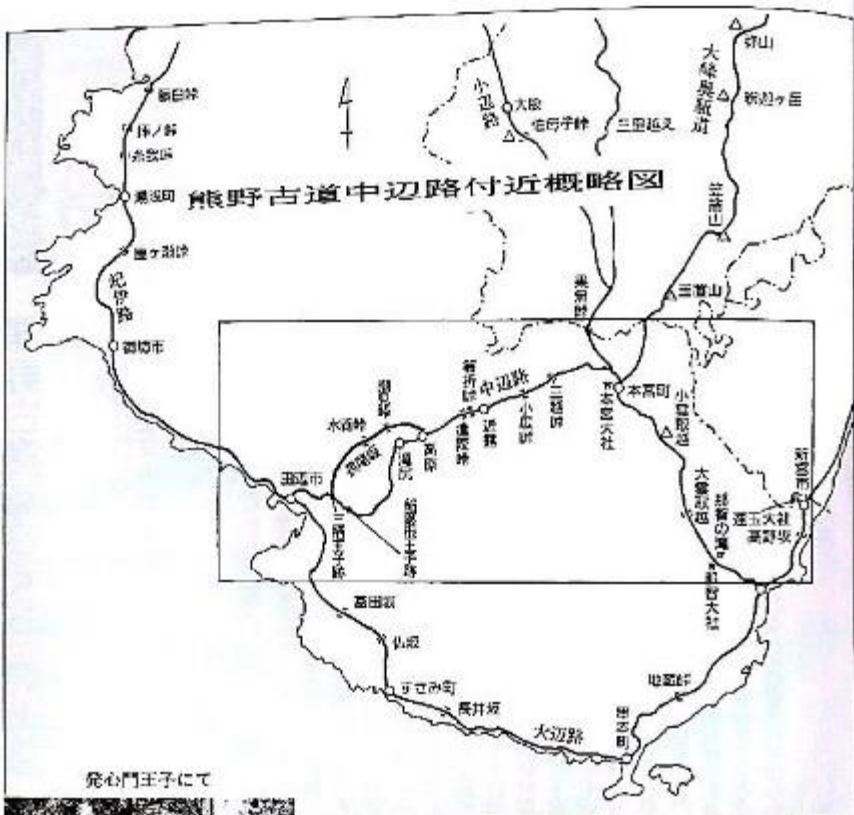
とがの木茶屋にて

熊野古道(紀伊路)は田辺市街で、山中に分け入る中辺路と海岸沿いをたどる大辺路の二つに分岐する。そして、山また山に分け入った中辺路が、田辺市三瀬王子跡付近で、再び二通りに分かれている。

かつての中辺路御幸道は三瀬王子跡から三瀬谷峠を越えて、富田川をさかのぼり、龍葉根・滝尻王子跡を経て高原に向かうルートであったが、南北朝時代になると、三瀬王子跡から左会瀬川をさかのぼり潮見峠を越えて高原に出るルートが熊野詣での主路として開かれるようになった。江戸時代に成った『紀南濃覽』には「昔は滝尻の王より高原へ出た由」と記されており、道が潮見峠越えのルートに改まってからかなり久しいことを物語っている。



ところで、熊野古道が文化庁の「歴史の道」に指定されたのが昭和53年の春。「歴史の道」としての整備が進み、その名はかなり知られるようになった。中でも、滝尻王子跡から近路の里、三瀬峠を経て熊野本宮大社に至る、約40キロのルートが特に人気が高い。今ここでは



発心門王子にて



滝尻から熊野本宮大社までの間を3コースに分割、それに潮見峠越えを加えた4コースを紹介する。

- ◇ 紹介する中辺路4コースを歩く場合は、コース中の至る所に、道標がつけられており、迷うことはない。(和歌山県観光協会等で本コースの地図を手に入れると便利)
- ◇ 各コースの(間い合わせ先)は次の通り
- 中辺路町観光協会 0739(64)0500
- 本宮町観光協会 07354(2)0735
- 和歌山県観光協会 0734(22)4631
- JRバス紀伊田辺営業所(0739)0594
- 明光バス 0739(22)5200
- 熊野交通バス 0735(22)5101
- 奈良交通バス 0742(22)1171

長尾坂から潮見峠越え

JR紀伊田辺駅から長尾行ききのバスに乗り、尾野原口バス停下車。左釜津川に沿う県道を進むと、斜め右上への道があり、入り口に長尾坂を示す道標も立っている。これより水ヶ峠まで続く長尾坂は、その長さ約十八町、熊野詣りの人々に、けわしい坂として知られる。また1418年、熊野本宮の参詣と寺堂の鼻山氏がこの付近で戦ったことが記録として残っている。

少し進むと、シイの大木がうっそうと茂るところがあり、その下に石仏がまつられている。再び道が二分、左手の百連に足を踏み入れ、ジグザクの石畳道がしばらく続く。竹林を抜けると、和歌山から二十里にあたる一里塚跡に到着。かつてはここに松の大木があり、旅人はその下でひと休みしたといわれるが、現在では梅畑となっている。

民家の庭先を抜けると、農道が横切っており、左へ長尾の集落に入る。山の中腹に民家が点在。登り切ったところで再び左へ、横山の雄大なスロープに吸い込まれるように梅畑の面を登っていく。背後に白浜、田辺湾、その向こうに紀伊水道の海が輝いている。

急坂を登りつめたところが水呑峠で、水ヶ峠とも呼ばれ、民家が二軒建つ。地名からもうかがえるように、この付近は水に恵まれていた所で、熊野詣りの旅人が休憩するのに、ちやうど都合のよい所だったようだ。峠付近には江戸時代中頃まで一里塚があったことが記録に残る。また茶店があった所としても知られ、茶屋の煙と呼ばれていた。

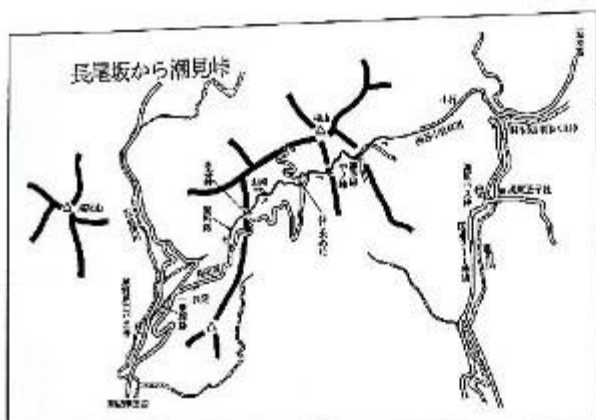
横山の南側山腹を縫う道がしばらく続き、左にお滝への道が分岐する。往復10分程度、杉林の間を登ると岩の間から水が流れる小さな滝があり、傍らに石仏がまつられている。往來の人々が喉を潤し、旅の安全を祈願した



潮見峠

のだらうか。

元の道に戻りなおも緩やかな農道のトラバースを行く。やがて安珍・清徳伝説で知られるねじ木の杉に着く。樹齢四百年といわれ、杉の枝が異様にねじれている。安珍を追ってきた清徳がこの木に登り、はるか下方を逃げる安珍の姿を見つけ、悔しさのあまり、この木を締めつけたところ、ねじれたという伝説がまことしやかに伝えられている。



ねじ木の杉

横山に登る車道を少し進み、すぐの分岐を右へ、再び山道に入る。谷の入り口にまつられた野仏にあいさつを送りながら横山の山腹道を進く。苔深い古道のたたずまいが残る杉林の中を進み、二、三度谷をトラバースすると潮見峠に出る。『紀伊熊野詣』に「尾より新宮まで海を見る事なし。依之名残りの潮見と

も初潮見とも云也。山腰亦風葉の浦白良の浜、眼下に見えて絶景なり」とあり、田辺方面から来た旅人は、ここで海としばらく別れることになる。また豊臣秀吉の紀州攻めの際、茶屋、山本・日長・湯河氏が防戦した土居城場でもある。かつての屋敷跡には杉の植林が進み、今では海を望むことができない。

西谷小笹林道に沿ってしばらく進み、5分ほどで、左下の杉林に入る。少して再び林道と台流、小川の集落を経て、国道311号線沿いの鍛冶屋川口バス停に降り立つ。

△コースタイム▽

JR天王寺駅(阪和線・きのくに線)特急で2時間程度JR紀伊田辺駅(明光バス30分)尾野原口バス停(20分)一里塚跡(1時間)水呑峠(50分)ねじ木の杉(40分)潮見峠(1

時間10分)鍛冶屋川口バス停(1Rバス45分)JR紀伊田辺駅(きのくに線・阪和線)JR天王寺駅
 (地形図) 2万5千―秋津川・栗瀬川
 △ドバイス◇ 部分的に道標の設置されているところもあるが、所々で農道が交差しているため、若干の誘図が必要となる。(見崎 弘幸)

登山に必要なものは、
田産・倉来
すべて揃っています。

足にピッタリ/
登山靴のことならお任せ下さい。

〒604 京都市中京区丸太町通堀川東入
☎ (075) 211-5768
FAX (075) 231-0318

山とスキーの専門店

京都 **ムラカミ**

滝尻王子社から逢坂峠

富田川と石川が合流する地点、剣の山を擁して、藤白・切目・稲葉段・泉心門と並ぶ五体王子のひとつである滝尻王子社が鎮まっています。上宮や女院、随従する公卿たちが折檻をとり、身を清めてからここに入ったとされる。杉木立に囲まれた静かな境内には小さな社殿が祀られ、鎌倉期のもので伝えられる空雲印表、石碑が立っている。古道は滝尻王子社の左側から始まっている。奥に築いた段上十八や、白衣の熊野巡礼が引きもきらずに続いたという伝説を偲びながら、高原への道を通ってみよう。

滝尻バス停下車。王子社の左端から急な坂道を15分ほど登ると、ほつかりと穴のあいた巨石が道に横たわっている。人ひとりや二通り渡られるくらいの穴で、胎内くぐりと噂される。その上に藤原秀衡の伝説を残す乳石がある。

その昔、奥州の藤原盛衡が妻を伴っての熊野参詣の途次、臨月の妻がはからずも急に産気づき、一子を産み落とした。夫婦はこの先の道中の足手まといになると思い、立腹の上わが子を乳石という岩屋に預けて、本宮への旅を続けた。子は山の猿に守り育てられ、岩から滴り落ちる乳を飲んで、両親の帰郷の頃には神やかに成長していたという。この子が後、和泉三郎忠朝となる。

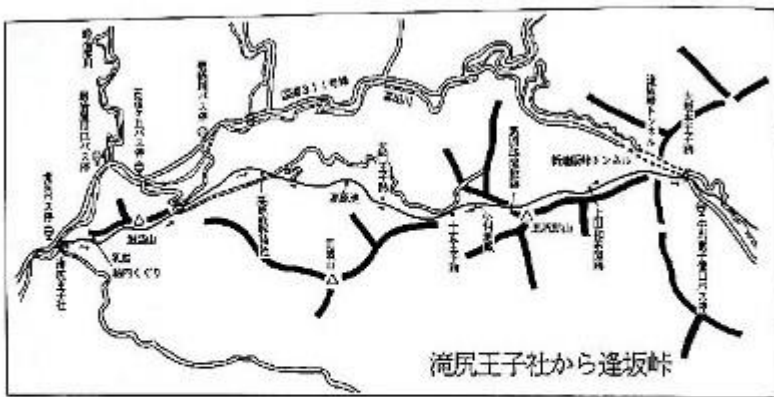
乳石の間を抜けて杉木立の中を進むと、少し草むらなところがあり、不審王子跡といわれる。なおも巻りて「中右記」に「三己が手を立てたる如し、誠に身力なきんぬ」とある剣の山の陰険と聞け。滝尻王子社を出ると約40分、視界が大きく開け、飯盛山頂上に行く。左手眼下に栗柄川の集落を望みながら、懐遠なコースとなる。

滝尻から高原への道(後方は飯盛山と高原の里)



平安時代の創建とされる春日造りの高麗熊野神社が右手にある。境内には楠の大樹がうつろいと成り、苔むした柏皮葺きの社が往時の面影を残して佇んでいる。この付近一帯は見晴らしの良い高地で、早朝山々に立ちこめる朝霧は何とも言えないファンタスティックな気分を誘ってくれる。

これよりかつての高原の宿場通りの道で、現在も当時の面影を残して民家が軒を並べて



滝尻王子社から逢坂峠



滝尻王子社からの道

いる。高麗池を右手に見送ると、最近再建された朱塗りの小さな社があり、その中に「大門王子」と刻まれた緑泥片岩の牌がひっそりと立つ。大門と称されるのは、ここに熊野本宮の鳥居があったからだという。

杉林の中、石原坂のゆるやかな登りが続き、家原百蔵が跋る十太三子跡に響く。江戸時代に数軒の茶屋があったとは思えぬほどあたりは山林化している。これより古くは悪西郷山の中腹をトラバース、逢坂峠の東口へと向かう。途中、大正時代まで人家のあったという上田和茶屋跡がある。霜月二十三日の夜、山の深から昇った月が三休に見えたと伝えられる三休月伝説の残る土地で、少し下った所に、二休月懸置地が設けられている。今でも、その日の夜には三休月御簀を染しむ大勢の人々でにぎわう。かつて朝白河法皇・藤原定家もこの既懐道を熊野へと向かったのであろう。

この辺りから大坂本王子跡・善折峠へと続く古道は長い道のりの中で、最も往時の姿を色濃く残している所である。

旧道沿いの大坂本王子跡を過ぎると上口道は津毛川沿いの道となり、最近改修された国道311号線の牛馬堂王子滝口バス停に降り立つ。

△コースタイム

- JR天王寺駅(阪和線・きのくに線)特急で2時間程度JR紀伊田辺駅→JRバス40分
- 滝尻バス停(2分)滝尻王子社(10分)乳石跡群(1時間30分)高麗熊野神社(1時間)大門王子跡(40分)十太三子跡(1時間30分)大坂本王子跡(10分)牛馬堂王子滝口バス停(1時間)JRバス1時間10分
- JR紀伊田辺駅(きのくに線・阪和線)JR天王寺駅

△地形図

- 2万5千1:1 栗柄川
- △ドライブス
- ◇本コースと「近隣の里から小広峠」三起峠から熊野本宮大社」の中辺路コースは、熊野古道の中で、もっとも人気が高い。近路あたりで宿泊する計画であれば、1泊2日のプランが可能。

(見巻 弘幸)

近露の里から小広峠

牛馬童子像口バス停下車。左手の山坂道に入り旧国道を横切ると右前方、白村に花山院が法華経と法衣を埋納したという重慶印塔が立っている。その奥には花山院がモデルと伝えられる牛馬童子像と後の行基の石仏が並んでいる。花山院の一行がここを峠まで来て、昼食をとった。その時隨従の者が答を忘れてきたことに気づき、傍らの茶を折って花山院に差し出したところ、花山院はその茶の葉から赤い露のようなものが流れ落ちるのを見て、「これは血が、露か」と尋ねられた。以来この地を露折峠と呼ぶようになったという。

露折峠を後に古道を下ると、眼下に日置川を配して、近露の里が絵のようになっている。田辺と本庄を結ぶ中辺路往還の、ちよんちよん中辺りに位置する近露の里は熊野詣での宿駅として開けたところ。

山また山の中山道を眺めてきた目に、近露の風景は別天地のように明るく映ったのではないだろうか。日置川に架かる北野橋を渡ると、すぐ左手に小さな森があり、「近露王子之跡」と彫られた大きな石碑が立つ。

近露王子跡からしばらく旧国道沿いの近露の町並みを歩く。近露は御幸の鎮守の地でもあり、古い旅館や雑貨店などに街道筋の面影を残している。しばらくして、国道が右に大きくカーブして行くが、その左側を古道は通じている。途中、野長瀬一旅の墓がある。南北朝時代、熊野へ出向いた南朝の大徳寺僧長親王一行がこの地で敵に捕獲。その時、野長瀬一旅が難せ参じて、護持居士の御座を救ったといわれる。

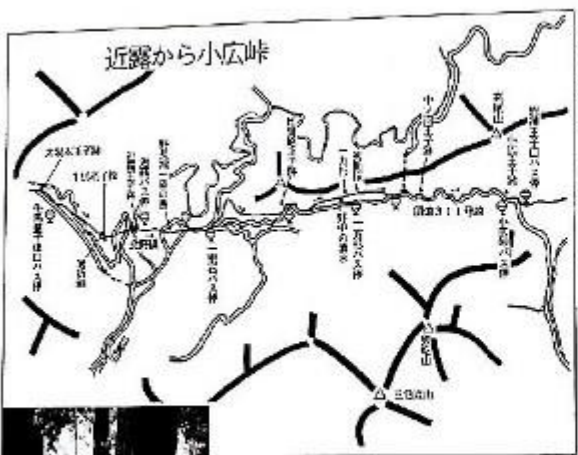
しばらく国道を歩み、近露神社、一里石を過ぎて近野公民館の前を左に入ると、すぐ右に登る細い古道があり、大畑の集落へと向か

牛馬童子像



ついで、再び国道と合流、国道沿いの左側山腹に比叡王子の石碑が立っている。「紀伊比叡王子」に、「比叡原王子執、村の小名比叡原にあり、御幸記に見えたり、境内に手杖松といふ名木ありしか枯れしといふ」と記され、往昔は碑のあるあたりに寺所があり、その上段に社祠があったとされている。が、現在では形が隠れられて、王子社の面影はすっかり失われている。

やがて、右手に国道を見え入ると、白馬通りの面影を成す古道に足を踏み入れる。800mほどで左手に巨杉がうっそうと茂る。一方杉に替り、鳥居をくぐり急な石段を登ると若一三三権現と呼ばれる王子社があり、往昔、権現で呼ばれる様があったことから、権現王子の名を残している。一方杉のすぐ奥には、柚皮葺きの「この木本堂・民宿」が建っている。此処裏を辿ると動物の糞をすするの



林道だ。なお、茶屋前の細い道を下り国道に出ると、日本名水百選のひとつ野中の清水が今も清冽な水を溢れさせている。傍らには芭蕉の門下、服部嘉吉がこの地を訪ねて詠んだ句が自然石に刻まれて立てられている。

古道に戻り、さらに半分ほど、猿原集落が杖としていた山根の枝を階段に突き立てたところ、見事に根付いたとされる老松、秀衡松がある。傍らに「林や御幸の興もゆるめけん」と詠んだ高須道隆の句碑が添えられている。春の朝この辺りを遡ると一面桜の花吹雪が舞い、目と心を染れさせてくれる。

秀衡松を後に国道と合流、しばらく古道と国道が交錯し、中ノ河王子峠、小広王子峠を越え、峠には桜、秋にはコスモスが揺れる古道ではあるが、アスファルト道はやはり、味気ない。ここは、国道に出るからバスで通り過ぎてほしいところだ。

△コースタイム▽

△長天寺駅(仮和線)・きのくに線



一方杉にて



特急での時間目安 丁R紀伊田辺駅 丁Rバス1時間10分 牛馬童子口バス停 10分 牛馬童子像 10分 近露王子跡 10分 野長瀬一族の墓 1時間20分 権現王子跡 20分 秀衡松 15分 中ノ河王子跡 30分 小広峠バス停 丁Rバス1時間30分 丁R紀伊田辺駅(きのくに線)仮和線 丁R交三寺駅

△地形図▽

2万3千1:10000 熊野川・密地

△この木本堂・民宿

07339(65) 0127

宿松 弘勝

三越峠から熊野本宮大社

小広峠バス停を後に国道を東に下ると5分ほどで若神王子口バス停に着く。これより古道は川沿いの道と大きく離れ、起伏の激しい山坂道を築山門王子跡へと続く。熊野谷川沿いに休憩所が建てられている。これより熊野坂の登りになり、約30分で若神峠に到着。ここまでの下りが女坂と呼ばれ、九十九折れに20分ほど通ると林道に出る。林道を左右半に少し進み、橋の川を渡ると伊人茶屋跡がある。そして、ここより熊野峠をさして男坂と呼ばれる急路を登るとことになる。所々に石垣の残るつつそうとした杉林の中に怪しい山の形が現れ、心洗われる思いである。

求神された女子、おきんが現の許しが得られたいという男の手紙に、迎えを待つのもどかしくいそいそと出かけるが、男の家を目前にして不幸にも濃霧に包まれたという悲しい話が語り伝えられている。

谷沿いに下っていくと、右手に山を背にして地形地蔵がまつられている。橋を渡ると道湯川資料の外れに権五体王子の墓所の一つであった湯川王子跡があり、広大な境内に最近建立された小さなながら立派な社殿がある。これより三越峠への急勾配の登りにかかると、三越峠は中辺町と本宮町の境界で、中世にはここに因所が設けられていたという。江戸時代になると茶店もでき、旅人の憩いの場所として大正の初めまで続いた。

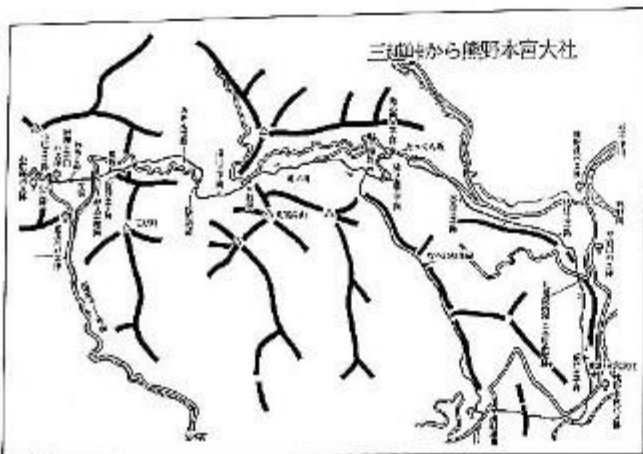
左右を山に挟まれた深い谷道を一気に下ると、岩盤の縁の川、湯川となるが、ここ

も山村の暮ら目にさらされている。ここからしばらく林道を伝い、途中で右に降りると、この様子を修復された古道が続いている。ほどなく左手に船玉茶屋、右側に玉輪峠跡をくぐった正面に船玉茶屋、右側に玉輪峠跡が祀られている。これより300mほど進むと、右手の細い道を下ると、猪ノ島王子跡を示す石碑が草むらの中に埋もれるように立っている。世無川のせせらぎと、のどかな山の辺の風情は、深く険しい山路を越えようとする旅人にひとときの安らぎを与えてくれる。

古道をしばらく進み、左上の林道に出て、右手、たたくん坂と呼ばれる道に足を踏み入れる。熊野定家が「深山極木多」と記し、かつて12人の刀者の担ぐ輿に運られていったという山深く険しい原生林の中の道であった。やがて築山門王子跡の鳥居が現れ、昔はここに熊野聖殿入口の大鳥居があったとされ、五体王子の一つとして精段の崩壊を受けていた。熊野聖殿の人々は、この前でお敵いをしてからくぐったという。

これより右へ林道を進む。すぐの分岐を右へ、旁心門の遺跡を通り抜ける。しばらくすると、小鳥のさえずりを聞きながらの快楽な道となり、水呑王子の石跡を見つけたことが出来る。この後、古里道新しい石置に接し

改め、杉、檜の木立の中を歩く。東進に出て、果無、大塚の山々を背後にまっすぐ歩を進める。やがて目の前に小高い森が見え、左の口



道を登りきるを右明台地に伏神王子跡がある。三三峠頂には平安時代の歌入、和泉式部が遺したといわれている。熊野古道を踏んで、熊野峠の長い道程の半で、ここにたどり着いた熊野詣での人々は、ここから熊野の神域を伏し拝んだという。付近は昔熊野の聖地として有名な茶畑で、大塚・大雲・小雲取の峰々を望み、足下に深い谷が開け、その谷の東の端の道が彼方、熊野川原の本宮大社旧社址を見おろす。まさに、熊野詣の聖地神域の地である。

古里道は美しく刈り込まれた茶畑の左右を本宮大社に向けてまっすぐ南下する。春はヤマツツジ、秋にはリンドウの花咲く、彩りあふれる古道歩きが楽しめる。やがて林道の上に取り付けられた小橋を渡ると、鳥居、關所跡である。道の左手側の山、岩むいた白岩石の三軒茶屋石標があり、「右かうや、左きみい寺」と刻まれている。ここは中辺町と小辺町の境で、南の方から見て、左の道が中辺町、右の道が小辺町である。右は熊野詣を越えて高野山に向かった古道である。

ほどなく目の前が明るく開け、破戸地帯を見おろす地点に達する。まっすぐ開地の中を突っ走ると右側に杉・うばめがけの茂る小さな森があり、猪ノ島王子跡がある。本宮大社にもうすぐだ。熊野本宮から十津川温泉を経て五交駅行き、あるいはJR熊野駅行きのバスもある。

▲コースタイム▼
 1 良天王子跡（飯和線・きのくに線 特急車で2時間程度）→JR紀伊田辺駅（1Rバス1時間10分）小広峠バス停（1時間10分）若神王子跡（1時間10分）湯川王子跡（1時間20分）猪ノ島王子跡（15分）築山門王子跡（30分）水呑王子跡（40分）伏神王子跡（1時間）破戸王子跡（3分）熊野本宮大社（10分）熊野本宮バス停（1Rバス2時間20分）JR紀伊田辺駅（きのくに線・飯和線1時間23分）JR天智寺駅
 ▲熊野詣▼ 2方5千1歩地・旁心門・伏神・本宮
 ▲アドバイス▼
 ◇ 本宮町内には湯の盛・わたらせ・川湯温泉・よく知られた山の出で湯があり、山歩きの際には汗拭きのもよいだろう。宿にも事欠かない。（見崎 弘孝氏）

近世の伊勢街道ハイク ②

名張街道 (お松明道)

奈良町(鹿野) 鉢伏峠(田原) 一合峠(馬場) 針ヶ所(所) 笠間峠(名張) 大宮(二月堂のお水取りのお松明の集落) 平水(昔から集落されている集落) 市(新井守(名張市)の村で集落し、笠間峠を越え奈良街道を走る)

中村敏文

お松明道の名張からの奈良街道は、京・大阪から奈良を経て伊勢街道へと進んで近世で、平安時代には伊勢神宮の参道が不祥事などで崩壊するさいに通る高王上院に指定されていた古道でもある。

お松明道の伝説行事は真夜中に極楽寺を出発し、奈良町近くで東大寺の田畑えを歩いて午前中に二月堂へ納めるのが古式で、最近名張市が復活した行事は市役所から極楽寺へ歩いて笠間まで歩き、中間は車を利用して、奈良町から東大寺までは古式に従っている。

近鉄・JR奈良線から鹿野区へは徒歩がバスを利用し、鹿野区から名張街道の旧街道の坂道までを徒歩へ登る。藤原大和山道の落着いた城和遷行所が古市にあったので、伊賀の上野城との連絡上重要な連絡所であった。餘近くには式内の宅布祖神社に比定する

春日明神と鎌倉期の地蔵石仏がある。

「左様峠を経て奈良街道」の右様から現在の奈良・名張峠と車なり、天智天皇第七皇子春日宮天皇(神武親王)陵の前を通り、若河郡鹿野の手前から旧道に入り、田原郷の一の宮であった天清神社の境内に入る。近世の若河の庄屋松本家(現在の鹿野町長宅)の御を建てるが、茅葺きの旧家は我が国の鹿野町鹿野尾時に御使物取扱所となった建物で、当時の御使物取扱の窓口がそのまま残っている。

南原の阿部氏鹿野石仏は鎌倉時代のもので、平行恒と元徳三年(1133)と銘が刻され白砂川沿いの長谷川にある。白砂川を離れて一合峠へ向かう旧道は、奈良・名張峠の車道で崩壊されているが、吉野の山道を一望出来る一合峠までは、蛇行を繰り返す歩き易いものもある。この坂道である。峠から2、3余りの植

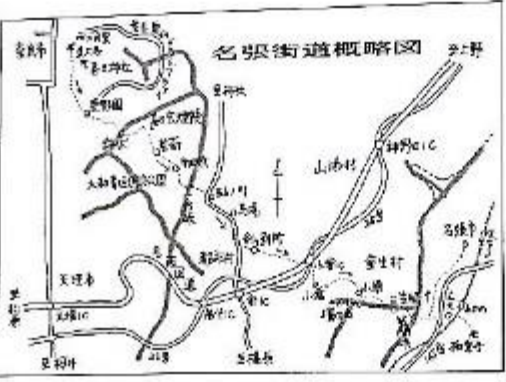


わが国最初の郵便局(松本家)

ノ川への下りも誤屈を道で、全村十数戸の近世の加ノ川には鹿野川口屋と茶屋があったそうだ。加ノ川から針ヶ所へ名張街道は奈良から柳生回りの国道69号線と重なっている。袖ノ川から余りで間の道であった馬場へ入るが、ここは奈良と名張の中間地点、奈良から四里ほどよい休憩地で二二の茶屋と旅館があったそうだ。馬場集落の東方の城山は室町時代の馬場城跡で、岩掛城(天理市山田)を本拠に大和郡原で小倉・多田氏らの土着と覇を築いていた山田氏の山城で、文武に優れた山田道安は備住氏と並び前井氏を支えた重鎮であった。

馬場集落の中心と布田川の南に残っている名張街道は伊勢街道と呼ばれ、神前神社の太神宮集落や、川久保橋の傍らと川の南外れには「いせ道」の道標が残っている。

村外れから再び旧道に入り、余り行つて區道から左へ分岐し、上戸買橋を渡つて行くと針ヶ所まで守神社が築屋する。小倉針ヶ所以北の都祁村域は慶長七年(1602)から藤本赤井氏の領地で、当地の大庄屋藤本住徳石門が總領していた。明治初年に藤上



郡山間部の役所(第一云云)が設置され、大和高原の行政の中心地となり鹿野(一軒)藤原五郎の賑わいをみせていた。六ヶ所の意味で六ヶ所小倉校がで鹿野町など設置されている。別所・針ヶ所・小倉校に設置された文書館街道は、ほどほど小倉に置くが、途中のお松明川原集落という鹿野が記されている。康永元年(1342)の北朝年号と頼朝(北條)頼朝

大工藤原利道の刻銘がある室町初期の石仏である。鹿野奇蹟の文和四年(1355)路の石造像は、小倉の氏神八柱神社の境内に、応仁の乱末頃に建てられた文明八年(1476)銘の石燈籠と並んでいる。

小倉から都祁山道と推定される笠間道へは南へ小山を越えたと山道で、坂の山の北山麓から東山麓を回ると小倉である。小倉は藤原王(三原王)のかりの土地で、藤原仲麻呂に連座して、藤原女帝と道徳に追われて当地に隠れ住んだといわれている。さなみに小倉頼王の二十一年(1171)天皇・藤原(池田)王や御原王の子の頼朝王の末路は悲劇的なものとなって、小原の八幡神社の本殿前の立派な石燈籠は頼朝王の原本の香炉で、寛永十五年(1638)銘と赤井六五郎の香爐銘がある。小原の社堂裏地に武士十名の奉納建立の永仁六年(1298)銘の阿弥陀石仏と永仁七年(1299)銘の高き石の持尊が二基ある。

小倉から上野町への都祁・名張街道は笠間川左岸に通じているが、近世の名張街道は上笠間の鹿野の手前から笠間川を渡り、右岸沿いに川上川の上流へ通じていた。

上笠間鹿野は旧道から笠間川の対岸の集落になるが、現在は都祁・名張街道の道標となり家内板が立っている。羊肉屋の阿部氏如

来の同側に文字で藤原藤原と藤原藤原を刻んで、天文三年(1534)の年号・無主名・物文が残されている。大和高原や中野山間に鎌倉・室町時代の鹿野石仏が多く残され、この近くでは笠間川の永仁二年(1299)銘の阿弥陀石仏などがある。

上笠間から笠間村への旧道は半ば崩壊しているが、笠間の枝村の時の集落では鹿野の松本屋が残り、茶屋のみじ屋ともども明治時代も営業していたという。

針ヶ所から針ヶ所川沿いの初瀬街道を越え道の坂の下への急な下りは、峠の北側を都祁・名張街道が通じたので、ほとんど利用されないうまま流れ流石になった。

坂の下からは都祁・鹿野をへて字院・名張川の台地地点を渡り針ヶ所は名張道、また坂の下から針ヶ所川を渡り大宮をへて大宮、瀬川口から瀬川川橋をへても大宮へ入る。本コースは30分、旧道を通るコースゆえ、針ヶ所バス停で二分、天理か藤原を結ぶバスの利用が賢明である。

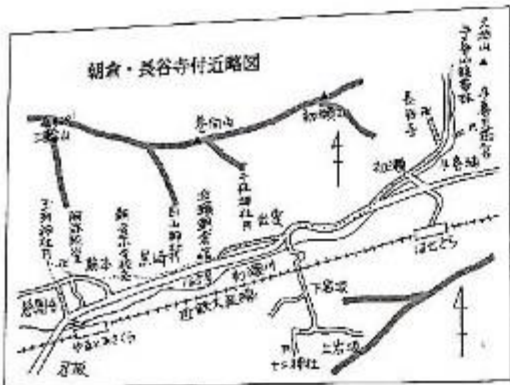


牡丹の艶

コース概要

今回のコースは、桜井市朝倉から初瀬の山峡の道を初瀬川に沿って東に進み、慈恵寺、朝倉宮跡伝承地の勝本、黒駒、出雲人形の出雲の集落、古い門前町の面影を残す初瀬の町並みを通り、長谷の観音さんと呼ばれる初瀬の長谷寺にお参りする。

近鉄朝倉駅で下車。初瀬川に架かる「やんげん橋」を渡ると、初瀬街道(伊勢本街道)。



華そのもの。唐の皇妃甄氏夫人の厭木に始まり、いまでは百五十種類、その数七千株におよぶという。花の頃はちょうど三半寺のシャクナゲと重なるため、花のハシゴと通称を人も多い。

口の香廊を登り切ると蓮三宮があり、その横に祀りのゆかりの梅の木がある。

人はいさ、心も知らず、ふるさとを

初瀬の道分 東はお伊勢
西はなにわで、北は奈良

と、「初瀬道分」に語られた初瀬の道分。初瀬街道・国道16号を橋を架けて直進すると、大徳神社の傍に玉列(列)神社の面影が出る。初瀬谷最古の社といわれる式内社。慈恵寺は玉列神社のついでに神宮寺。両神宮が残り。

勝本の朝倉小字夜一帯の地は「磯城(いそぎ)宮(みや)」。宮調査によって発掘調査が続けられている。その結果大規模な存在が確認され、姓略天皇の泊瀬明命(みこと) 武烈天皇の泊瀬列城(りやうじょう)などとの歴史が推察されている。

勝本の白山神社の境内には、桜井市の生んだ政治家保田五郎吉の「萬葉集後継者御碑」が建つ。この碑の後方の山が宇天の森で、嵯峨天皇の泊瀬朝倉(あき)の跡と伝える。

しばらく国道を歩くことになる。出雲の集落の中に十二柱神社がある。この辺りは武烈天皇の泊瀬列城宮の伝承地。武烈天皇は、凶暴な性格で可憐な腹味の持ち主だったようだ。平群臣節の恋人影塚に想いを馳せ、跡を遺してしまふ。影塚の哀れな歌が残されている。

「新ハイウェイ9号」北山/近の道(参道)境内の巨大な五輪塔は、古田神社と相撲をとった猿田彦の墓と伝える。猿田彦を支える首座

花を首の音にほひける

「古今和歌集」 卷一 春上(七)
あなただのほうは、さあ、どうか、お心のうちはわかりません。ひょっとしたらお心も変わってしまったかもしれません。昔なじみのこの土地では、梅の花だけは昔のままの香りで吹きわたっていることだ。

「百人一首」(な)じみの深い歌だが、しばらくふりて尋ねた家の土人に確認した。たの皮肉られたときの即答歌だという詞書がある。

舞台作りの本堂まで登ると、幾枚もの屏風をひきめぐらしたような山並みに囲まれた初瀬に、桜が影裏のように深い。極浄土もかくありなんと、美しさと先物となる。夜垂れ桜の見事な枝振りが、春の初瀬に人心を奪う。初瀬川を挟んで東に流れる天神山(ひやうざん)500・300は、与喜大神社の御体山で、天神が御神となつて降臨したと伝える。今も人手が加わらない原生林は、国の天然記念物に指定され与喜山脈群と呼ばれた麓に定着している。思いきり深呼吸すると山の空気が心地よく胸の奥まで届くようだ。少しし時間を忘れて「鹿口の温泉」の湯気の中に身をまかせ。お堂から流れてくる湯気の方音にあと我にかえる。そこそこは西国三十三ヶ所観音霊場の第八番札所。湯気の煙を境内に入ると、思

はその故事にちなみ、四人の力士像。寛永の代わりと増強を築きたという名残りが、素朴な彫り出雲人形となって残る。

国道と分かれると川に沿って古い門前町の面影を残す町並みが続く。古い格子のほまつな旅館の建ち、名物の串餅を作りながら売る店や土産物屋などが両側に並ぶ。「右いせみ」と刻んだ大きな石標がたっている所が伊勢川。伊勢木街道は、伊勢社を右折し、急な登り道で化粧敷を越えて与喜浦の集落に入った。この坂で天照大神を祀る所を求めて伊勢に向かった後、命が化粧を直したという。初瀬音頭「初瀬の舞台から化粧敷見れば、お伊勢甲子(あ)が登りて、...」と歌われた。

西国三十三ヶ所巡りの開祖徳田上人をまつる法起院は、町中であって、白無神社と向かい合っている。ゆるやかな坂道は左に曲がり、仁王門へと続いている。ここから本堂への道は有名な長い登壇。百八間、三九九段の回廊形式の石段。段というには少々低すぎる石段は、人の歩幅に合わせたよう。薄紗納言の頃は急な坂道だったという。天井には風雅な桐四形の長谷梨絵籠が数間おきに吊られ、両側の柱や障子の影との調和が実に美しい。

五月の連休の頃、このあたりはボタンの花と人の波で埋まる。よくよみかたらしい花は家

わチ「コアツ」と声をあげた。身の丈三十二尺六寸(16尺)の巨大な十一面観世音菩薩が、金輪に輝くお姿で迫ってくる。右手に錫杖と念珠、左手に水瓶を持つお姿は、観音・地蔵のお徳を併せ持ち、世に長谷観音と称せられる。数限りない霊験を奉られる観音像にそつと手を合わせ、本堂の太い柱に身を寄せると、遙か女貞、物語での昔人たちの衣擦れの音を聞いたような気がした。

「ハコースタイム」

- 近鉄上本町駅→朝倉駅 590円
- 近鉄長谷寺駅→上本町駅 559円
- 《地形図》2万5千→桜井・初瀬
- 《問い合わせ先》
- 長谷寺 074444(7)7991
- 拝観400円 8時~17時、牡丹の時期は7時~18時、10月~3月は9時~16時30分、桜は4月上旬~中旬、菫花は6月中旬~下旬、紅葉は10月末~11月、旬が可也。

関西周辺

山の春陽

特選 コースガイド

- ① 剣尾山から横尾山
- ② 小金ヶ嶽と三嶽
- ③ 雨乞岳
- ④ そうめん滝から氷室池

久しぶりと早起きした休日、ザックに山行の荷物や弁当を詰める。今日は良い天気だ。寒さも和らぎ、寝覚めもすっきりしている。マイカーにザックと登山靴を入れ出発する。道



早春の山・雑草

そんな日に春めいた空気を感ずる。このころになると、朝の光が新鮮だ。まだ暗かった朝も過ぎ、今では明るくなっている。この近所の朝も早くなった。もう車道を降りる音がする。

ながら、街路樹のイチヨウや川楳樹に新芽が萌え出ている。家々の庭の木にも小さな緑が ついていて、こんな春を感じながら、山に行くと何となく心がうきうきしてくる。

寒い冬は、近郊の山で我慢してきたが、やっと遠くの山へも行けるようになってきた。もう雪はないだろう。久しぶりに展望の山へ 地道を踏んで登ることが出来る。

林道に車を乗り入れると道端にフキノトウ がいっぱい顔を出している。谷は雪解け水で 濡って流れが早い。さきほど雨に降った雨で、 地帯の林道はドロドロになっていた。

今日は、登りがいいのさ。山だ。自宅から2 時間も走ってようやく林道の終点に着いた。 軸林された杉の樹間に日光線が斜光となって射 し込んでくる。今日も気ままな単独行だ。地 図を出してもう一度コースを確認する。

春の山はやはり良い。植林帯を抜けると、 白い花が咲いている。コブシかタムシバの花 だろう。足下には野草が青々と葉を広げ ている。スミレやタンポポもすくすくと咲いてい る。汗をかいて登ると山頂が待っていた。し ばらく誰も来なかったのだから、踏まれてい なかった山頂広場の土はやはりわらかくふんふん である。一旦先に来て、山頂の春を独りし、も う次の山のことを考えている。

たのしい山歩き

尾瀬雑考⑬

「変わりゆく山小屋」

松下 満

山小屋（フイコール）^{山小屋}の主人にむくつ けき山男。こんなことを彷彿とさせるのが昔 の山小屋のイメージである。都屋の造りも大 部屋「最低でも八畳・屏風裏の寝床、そ して屏風裏かストープのある談話室・原則的 には男女別の相部屋など……」

都屋の隣で何となくボソボソと通している 人達も「どこから来ましたか」「天気で良かつ たね」のあいさつと共にいっしょか一つの輪に なり、その日の出来事、山の状況、果てはお 同好となり、次から次へと話に花が咲き、 百年来の知己に会ったかのような感に浸った

ものである。

昭和、早稲の同窓会も、再会を約して見 送った。こんなことで友達の輪が広がり、そ の人達の故郷の山へ行くときは連絡をとって 同行ガイドをお願いし、楽しい山行となった ことも数多くある。尾瀬でもこんな光景は日 常茶飯であった。

道路の整備等により交通が便利になると、 いわゆる昔風の山男、山女の姿が徐々に少な くなり、家族連れや小グループのハイカーが 増えはじめた。特に昭和40年代後半からのハ イキングブームで一段とその傾向が増えた。

松家族・岡地住まいで隣近所の付き合いを ほとんどしない人達は、山小屋での相部屋を 若干とし、山小屋をまるで民宿くらいに思っ て個室を要求するなど、従来員とのトラブル が絶えない。

尾瀬の山小屋も多岐化等により近年建て替 えをするところが目立ってきたが、間取りは 昔と違い小部屋（四・五・八畳）を主体とし た建物になってきた。昨年は元湯止荘・温泉 小屋本館が建て替え工事を行なったが、やは り小部屋が主体のようである。時代のニーズ に合わせたというべきなのだろうが、古き住 き音を知っている山男、山女にとっては懐し いかぎりである。

昭和7年に建てられた第四郎小屋は今も健 在である。周辺の山に遠征を求め、仗り倒し た原木を現在地に運び、手挽き鋸で柱・梁・ 板と製材加工して建てた小屋である。食室の 天井・階段・窓の土留り・建具・床の間に等 に当時の大工さんの腕の跡を見ることが出来 る。

屋根は松の檜皮で葺き、現在もその一部が 残っている。無く思える屋根がそれである。

同じ年の建立に檜枝小屋がある。初代オ ーナーは「尾瀬の会」田中某さんとか、その 後現在の人に移っている。

温泉小屋本館（のちに増築されている）も 昭和6、7年にかけて建てられたそうだが、 今はその姿を偲ぶすがもなない。

尾瀬の山小屋業界といわれる長屋小屋の現 本館は昭和9年に現建物の約半分の規模で完 成し、その後、増築を繰り返して現在の姿に なり、尾瀬地区では最大の収容力を誇る山小 屋となった。用材は杉・松・杉・桐・栗、周辺 の山に采伐している。

戦前に建てられた山小屋も数軒を残すのみ となり、これらもいすれば建て替えられ、小 部屋中心の山小屋となるであろう。見知らぬ 者同志の山小屋での話のいもやがては消えて いくのであろうか。

2等三角点のある山

剣尾山から横尾山

初級コース(★)
山形 成之

近畿百名山にも取り上げられている北摂の名山剣尾山(784.4m)から、2等三角点のある横尾山(784.9m)へと登る。

阪急電車の池田駅から能勢の進行きのバスで、行者口で下車すると、行者山・剣尾山の道標が立つ。主・兼寺を過ぎると前方に行者山の岩峰群が大きく広がる。

林道を能勢の郷キャンプ場の横谷に達して行くと、右側に行き山の家内坂と石壁があり、ここが登山口である。登山口の直前に3台くらいは駐車可能な空き地がある。

右ハススキの中の良く踏まれた道を登って行くと、層岩のある大岩の前になる。振り向けば眼下に能勢の郷が広がる。行者山はその名の通り後の行者が開いた山で、山の斜面

にはかつて行地だった幾つもの大岩やお宝などがあり、時間があれば案内板を見てゆっくりと一歩してみるのも面白いだろう。

行者山の稜線に出ると境界が開ける。良い道を少し下って降りかえすと、三角点のあるピークの肩に出る。登山道から外れ、道のなれ林の中を少し寄り道して登って、点名行者山(784.9m)を覗いていく。

やがて六地蔵、すぐそばの岩のところに崖陰地蔵も鎮座している。地蔵の前の空き地の中には、登山ノットが結められていた。

月峯寺跡を過ぎると横尾山はひと登り、山頂の大岩に立つと展望が広がる。北にはこれから訪れる横尾山が横たわり、肩には反側板が立っている。見渡すと、北摂の山々がおたやかな姿を見せていた。

山頂は広くて、多人数でもゆっくりとくつろげる。立派な方位磁石や山神が祀られていて、百名山に恥じない頂である。

ゆっくりと休んだら北へと下って行こう。やがて再降、丹波の国界と刻まれた大きな石柱の立つところで道は二分する。ここでは標板に従って大折し、笹の中の道をゆっくりとくだっていく。

道はやがて登りとなり、登りつくと手標と同じ国界の石柱が立っている。前方には剣尾

展望はあまりよくないが、北方にパラパラアンテナの立つ深山が大きく見える。標石のそばには、六地蔵にあつたのと同じ空き缶に、登山ノットが入っていた。

下山はそのまま西に進む。尾根の端で泉流の稜線と分かれて、左へ、能勢の郷へと延びる尾根上の道をだらだらと下って行くと、やがて岩の道なる小さいピークに出る。地図にトンビカラと記されているところだ。振り向けば、今登った剣尾山が大きな姿を横たえている。

登山地図では、道はここから右下の砂防堤へ降りているが、実際はそのまま尾根上をまっすぐに南下して、能勢の郷へと続いている。頂上広場の標石が出てくると、もう能勢の



剣尾山の六地蔵

郷の裏山で、遊歩道が左右に延びている。この道に入っても下山出来るが、そのまま直進すると、一休み峠から400mほどのピークを越して、能勢の郷の郷十郎の前に降りた。バスの時間を確かめて、余裕があれば、断髪保養センターに立ち寄り、一汗流して帰る。

△コースタイム

行者口バス停(15分) 行者山登山口(1時間20分) 剣尾山(35分) 横尾山(1時間20分) 能勢の郷

△地形図

2万5千・妙見山・相生
昭文社「50北摂の山々」

剣尾山の山頂



山から見えていた反側板がある。ここで左折して、少し崖の緩い道をたどると、すぐ横尾山の三角点に出る。笹の中に紅葉標識や古びたポールが立っているだけで、ひと休みする空き地もない。そばの立木に古びた山名板がわずかに横尾山を示しているが、三角点に異味がなければ通り過ぎてしまえばよかった。それでもここは、2等三角点の山である。ちなみに百名山の剣尾山には全く三角点がない。

△問い合わせ

阪急バス 0727(34)0612

日・祝日(年間) 阪急池田駅発 9時・10時の

二便あり

能勢の郷 0727(34)2211

アスレチック・テニス・キャンプ場などあり

能勢保養センター

0727(34)2200

入浴料は500円

茶 通信販売

くつろぎやすらぎのティタイムには
やっぱりお茶が ティパックが便利です。
山へお持ちください。ご家庭でもどうぞ。

1.煎茶	3g	全品150個2重包装 どれでも100円入
2.ほろじ茶	3g	
3.玄米茶	2g	10g* 200円 5*2000円 送料450円
4.フーロン茶	4g	5g* 500円 5*500円 送料450円
		3g* 700円 5*500円 送料450円

●商品は1週間に1回お届けします。
●代金は郵便振替(振替)でお支払いください。
●お申し込みは必ずお電話にて。
●異時異所各種ティパックがございませうので、ご一顧ください。

茶 専門店 いっしょに楽しむ

代表者 野村品子(東京都・山梨県) TEL. 0262(26)210316
〒260 大宮市東区大宮1丁目2-2 FAX. 0262(26)210315

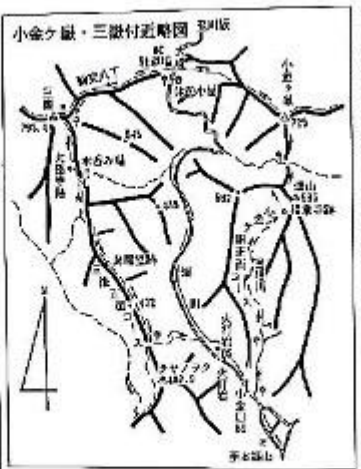
多紀アルプス

小金ヶ嶽と三嶽一等特点

初級コース(★)
慶佐次 盛一

大小のピークを連ねながら、鏡山無地北方の空をくっきりと区切っているのが多紀アルプスである。多紀アルプスは要する長大な山脈で、私は東方の樫ヶ嶽から長沙山(630m)へと連なる山脈を多紀アルプス、八ヶ嶽山から峠山(630m)より、小金ヶ嶽、三嶽、西ヶ嶽と連なる山脈を多紀中央アルプス、三嶽の峰(577m)から新山、三嶽山、夏雲山、馬頭峰と連なる山脈を西多紀アルプスと呼んでいる。

多紀アルプスの全山縦走は整備された道が少なく難しいが、ここでは道標もあり比較的整備された小金ヶ嶽正面コースと、三嶽正面コースをとり、小金ヶ嶽と三嶽を巡る多紀中央アルプスのコースを紹介しよう。登山口



大嶽はユレイ峠とも呼ばれ、駐馬場やトイレ、休憩所もあり、北側の腰切も守られるから登りにはいい場所。ひと息入れて三嶽へ向かう。整備された道で登るとはいいが、長い階段に気が切れる。やがて行者堂前に出て三嶽(御堂山頂)に到着。ここにも山形のテンプルがあり、1等三角点はその側に埋まっている。三嶽と峰とも呼ばれる頂が意外に狭く、眺望の方も小金ヶ嶽に一步劣る。アンテナの壁から西ヶ嶽への道も通じているが、この道は経路者向きである。

ここでは元の行者堂に戻り、道標から三嶽正面コースを火打岩へ下ろう。最初には植林帯だが次第に雑木帯となり、小金ヶ嶽や西ヶ嶽を見ながらの下りとなる。道標にひっきりと伴って歩

の火打岩行きは便利な1Rバスが、平成5年3月のダイヤ改正で日曜日に運行されている。1R及藤山口駅前から、9時45分発(平成6年のダイヤ改正を確証のこと)本線山行きバスに乗る。このバスは終点の本線山で、10時55分発の火打岩行きに乗り換える。このバスを逃がすと、午後までないので乗り遅れないように注意しよう。火打岩行きには本線山二つ手前の北口でも連絡しているから、北口で下車して火打岩行きを待ってもいい。



三嶽正面コースより

終点火打岩手前の小金口で下車する。正面左手に三嶽の頂が見えているが、これから登る小金ヶ嶽はまた見えない。道標があり、宝鏡川に沿った林道を歩く。林道終点にも道標があり、右下に崖壁を降り下ろして静かな植木の道となる。二つ三度宝鏡川を渡渉して、道は宝鏡川右岸に沿って進む。緩い登りが続いて、前がぼつと開ける所に出る。登路は左の尾根へ登って、宝鏡川の源流を巻いているが、ここでは細い踏み跡をたどって宝鏡川の源流へ下ろう。幸むした源流で水もあるが大したことはない。源流左岸の踏み跡は次第に右へ向き、左の木の幹に赤い残照テープが見つかる。再びはっきりした登

りの道となり、大嶽階段を登り、三嶽の頂上をめぐり、三嶽寺跡に着く。道員寺は法皇の建立と伝説が盛んな山頂には道場の一つだった。文明14年(1482)に大嶽の修験者達によって焼かれた。しかし、今でもしっかりと礎石が残っている。福原寺跡から踏み跡を北へ歩くとすぐに長く踏まれた登路に合流し、権間から小金ヶ嶽の形姿を見ながら宝鏡山を巻く。小金ヶ嶽の鞍部を下る。道標があり、一部には階段が設置されている。ここから小金ヶ嶽へ一気に登りだ。山脈を巻くコースもあるが、鞍部にコースをとった方が展望がいい。再び西方に三嶽が見え、足下に孫山無地が見える。谷地を取り巻く山々が見渡せる。岩場を越え、傾斜が緩み始めると小金ヶ嶽根に近い。山頂は蔵王ヶ嶽とも呼ばれる山形のテンプルがあり、兵庫丹波、京都丹波の山々

京都・久多 女性がつづる山里の暮らし
久多木の実会 編 四六判・一九〇〇円
滋賀・福井県境に近い京都北山の奥、花笠踊りや松上げで知られるわらぶき屋根の里、久多の女性たち
ちが自らつづった山村民俗時記。

近江朽木の山
山本 武人 著 B5判・二〇〇〇円
踏み荒らされていない自然がこんな近くにあることを知ってもらいたい
約20山グラフィックガイド地図付。

ナカニシヤ出版
京都市左京区吉田二本松町2
京都部 075-751-1211 〒606

特選コースガイド(四)

鈴鹿

清水ノ頭尾根から

雨乞岳

中級コース(★★★)
岩野明

雨乞岳(1793m)は、鈴鹿第一の高峰で、近江平野から蒲向山と共に際立って自立して存在である。冬の雨乞岳は、鈴鹿スカイラインが閉鎖されるため、アプローチが長く、登る人はほとんどいない。私も細く谷や中津川の林道から何回かアタックしたが、失敗した。

3年前の冬、野洲川グムの嶺から岩と奥若山に登った。正面に清水ノ頭の稜線が見え、かなり下まで草原が続いている。清水平谷林道からこの稜線に登るルートが簡単で、たら、冬の雨乞岳にも無理なく登れると思いついて早速3回アタックして、新ルートを発見した。このルートは積雪期でも3時間以内で登れ、しかも人が全然入っていないので、鹿やカン

モカに会うことが出来る。初めて登った時には3頭、今年7月4日には清水ノ頭の笹原で約10頭の鹿に出会った。

車で深山橋から野洲川グムを回り込み、白合谷林道に入り、橋を渡って清水平谷林道を進むと、「進入禁止」の立て札があり、広場になっている。ここは駐車もできる。尚、清水平谷林道を歩いた場合、橋から約2分ほど広場に着く。水を右の谷で補給して、左杉木立の目印テープのところに入る。

道はつきりしないが、右上に登ると二次林の尾根に変わる。尾根の急坂を登るとフェンスが出てくる。中は刈り込みの終わった4、5年生の杉の植林である。このフェンスの内のけもの道のような支那松をストリートに登る。このあたりでカモシカに会えるかもしれない。急登が続く距離も長くなる。鐵ヶ岳が一際目立つ。まわりは大きな雑木の植林に変わり、なお進むと後継に出る。更に行くとも平らな所にスタックがある。うっそうと繁った植林の中を清水ノ頭に向かう。急坂を上がると草原に変わり、急に明るくなる。カヤ原の中にアセビの群生が適度に散る。ここからは鹿の笹原で、気持ちのよい広い草原が清水ノ頭まで続く。静かにしていると鹿に出会えるから。冬は吹きさらしとなってうっすら雪が

清水ノ頭から雨乞岳を望む



積もり雪もつまっている。草原の中は鹿の道が並び、所々に広場もある。

気持ち良く歩いてゆき、笹が現れる。清水ノ頭であるが、頂上はつきりしない。眺望は一気に開け、蒲向山からカクレグラ、ダイショウ、南は鐵ヶ岳から西に延びる山々が続く。正面は雨乞岳と南雨乞岳のピークを望み、尾根を楽しんで、又、尾根の笹原を進み登りさったところに奥の畑の白い杭があ



清水ノ頭への草原

る。7月4日倒れて朽ちかけていたので立て直しておいた。さらに進むと登山道は尾根の右側、笹原の中へ続いているが、笹原をかきわけて進む

のは大変だ。尾根の左側の林の中をストリートに登る。笹原が多くあり、ほとんど登りつめたところから右に進むと登山道が出る。雨乞岳はすぐ目の前。雨乞岳の頂上はあまり広くないが、展望はすばらしい。特にスケールの大きい雨乞岳全体がよく眺められる。ここから雨乞岳へは笹原をかきわけて進むが、途中、道がはつきりしないところがある。



雨乞岳付近略図

尾根は同じルートを下りるが、清水ノ頭の笹原には、登山道の下、両側に道の道が並び、鹿の道が通っている。鹿たちもよぼよぼのようで、背の低い笹原を通っている。途中、広場もあき。この道を進むと清水ノ頭に着く。笹原は雨が強いので道が低い。この空のルートを走るたびに、以前四国岳の山を登った時のことを思い出す。

大津を回って下りる場合、白合谷の上流に砂防ダムがあるが、ハシが取り壊れているが、朽ちているので渡れる。

松田敏男 山の版画・絵画展
3月1日(土) - 20日(日) (休 曜 休 日) 12:00 - 6:00

松田敏男の版画・絵画展
1970年代から山をテーマにした版画・絵画展。松田敏男の版画・絵画展。1970年代から山をテーマにした版画・絵画展。松田敏男の版画・絵画展。1970年代から山をテーマにした版画・絵画展。

いとおふ

〒510-0852 和歌山県和歌山市和歌山
TEL: (0742) 22-0213

姫路の背稜山地縦走

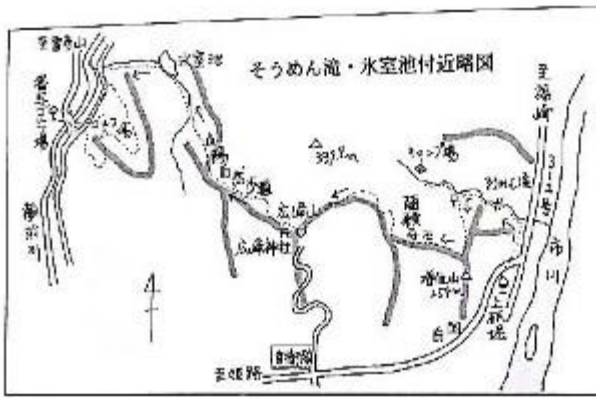
そうめん滝から氷室池

初級コース(★) 須磨岡 輯

姫路市内から北方を眺めると、まず目に飛びこむのがこの山城で、今回その一部を紹介しよう。

この山地は西播磨国立自然公園と山陽自然歩道に指定され、標高は200〜350mの低山であるが、古刹が多く昔から多くの参詣者が歩いた歴史的なコースで、四季を通じて菜しめ、子供連れのハイカーにもお勧めの出来ると思う。

JR姫路駅からバスに乗り、上級で下車し、旧出入口に立つ「そうめん滝」の標識に誘われて歩き始める。まもなく三差路、これから登る「ますみ」ひろみね、ちかみら」と書かれた古い石柱に従って左折する。和々ぐ春の陽と静かな家並みを楽しみながら進む。



にかかると、二日でも距離が短いので朝に少し汗がにじむようになると正面に立派な石柱が現れ、これを回り込んで広範神社の境内へ飛び出す。この神社は京都の祇園八坂神社の本社とされ、境内の建物の多くは文化財に

基地を造ると右に溪谷が現れる。舗装された道だが、夏のシーズン以外は車と出会うこともなく里山の風情が楽しめる。

ほどなく、バランコーロー「そうめん滝」の看板を過ぎると目印に大岩が目飛びこむ。岩上には不動明王様が据えられ、その下に行き違えの修行する滝が二本落下して大岩を打っている。コースは大岩の前を通り対岸のハイキングコースへ渡る。左に瀧音を聞きながら堰堤、そうめん滝、岩滝、と過し、高滝池を渡り再び直進へ出る。「西播磨国立自然公園」の立派な看板がある。直進を貫通すると市立のそうめん滝キャンプ場、増位山へは道標に従って左折する。雑木・笹・杉等の混在する気持ちのよい登りなので一気に区間まで登る。

やがてなだらかな尾根道になり、糸の細さの湯明板をみて古刹公園(湯明寺)に到着。ここからは南東側が肥後郡山・増位山が望め、手前に和らいた光に輝く市川の流れが見える。南へ東尾根コースが伸びて増位山三角点を経て白回へ通じているが、そのまま尾根伝いに竹林の中を左に下り、増位山の境内に入り高滝城主の墓前を通ると、増位山梅林の中である。花期の終わった枝先に小さな青い実が成っている。宝成池へ出ると池元

指定されている。近郊からの参詣者も多い。歴史資料からは姫路市内にもちろんのこと瀬戸内海の島々まで望める。正月の元旦には初日の出を迎えようと多くの人が賑わう。 展望を楽しんだら出発しよう。樹林の横を抜け裏手に出る。展望のない尾根道を進むと赤い標識が目につく。関西電力の送電路との分岐である。この先は徳富建設建設の予定地になっていて現地調査が始まっている。今回は直進しよう。まもなく樺木が倒くなり正面に増位山神社のうっそうとした森が見えてくる。このあたりから氷室池に流れこむ谷まで、急坂を二氣に下り標識に従って直進。まもなく谷筋に広くなり飯倉炊きさんの釜跡を横目に見て進むと、水溜りの氷室池の上部へ着く。少しの間、池に沿って歩き途中からコースを外し池へ降りる。ノバラがあるので歩きやすい所を選び池の中央へ出る。しばらくの間、周囲の景色や池の大きさを、いつとも違う視点から眺めてみるのもよいだろう。 飛び石伝いに改修されたばかりの環状に登り、すぐ下に続く道を登り治いに歩くと林の中に民家が見える。山頂平地である。これを突き切ると夢前川の立派な遊歩道が現れる。左折し夢前ゴルフ場入口前を通り、山頂を渡ると夢前ゴルフ場のバス停に着く。



雪あそびの姫路背稜山地

白国の人達の奉仕で遺跡され、山上の寺院に静寂が漂っている。増位山の分岐から一気に歩いてきたので本堂前でひと息入れよう。境内の多くの御堂が改修もされず朽ちかけているのを目にする。時代の交差点を感じる。 さあ、広崎山へ出発。岩壁に従って歩き始めてまもなく、立派な道路が寺の下まで入り駐車場が整備されているのが目に入る。すぐ側に四阿も建てて公園化されているが、歩き出して間もないので長足は無用と公園を突き切り広崎への尾根道へ入る。平坦な敷地されたコースをしばらく進む。小倉越しに谷を挟んで広崎側に白い建物、ハイルランドピラ塔路・N.T.T等の鉄塔が見え隠れする。まもなく下りになり樹林帯を通過は数部まで下り、ここからこのコース一番の絶景

△コースタイム△

姫路駅(バス25分)上級バス停(10分)行場(15分)登山口(10分)増位山(45分)広崎神社(45分)氷室池(15分)夢前ゴルフ場バス停(バス25分)姫路駅
△地形図△ 2万5千1姫路北組 5万1姫路
△交通△ 姫路バス本社前「J.R.姫路駅北口」からの福路・栗原・瀬谷各方向行きに乗り上級堀で下車する。

会報「登壇」第二十号
創立二十周年 特別号
〇「伊藤忠成の見た山々」長岡正利
〇「富士山山頂三カ所」多摩野雄
刊価 (送料別) 1000円
99年12月発行 + BS195ページ
〒615 京都市右京区藤原町
10-17 三谷忠男
TEL 075-672-9478
(申込先) 本誌の巻末にて新ハイキング研究会まで



山岳夜話(第2回)

小泉誓純

嵐山冬景色(二)

まさかこんな風景をみられるとは……。
 ぼくは同乗の彼女をちらっと見た。彼女は、
 ぼくと同じく、苦笑して下を向いた。

「無神経なヤリだなあ。怒るのも大人げないし、いちいち説明の要は、勿論ないし、その気もない。」

「酒当直三郎が見つからなかつた。」

「キミ、すていごを言うんだね。」

そのしほらくあとで、ぼくは、偶然であるかのように、彼女のボートの左舷側近づく。こちらの舟首で体当たりした。そして、きほどの彼女の目をにらんだが、彼女はぼくの視線を避けて、こちらを見ようとしなかつた。しまったと思つていたのである。それなら、まあいいだろうという気になった。

さきほどの舞臺の所を再び通過して、ゆるやかな所まで下つてくると、そこにも別の女性二人組のボートがいて、舟首の一人が、立つてキターをかき鳴らすジュースチャーをしながら、何やらロック語でわめいている。

彼女は独り言のように言った。

「関西の女の子って、何となくマンガチックですわ。」

これにはちょっと困惑した。ぼくも関西人である。関西の女の子のために、何か反論したかつた。だが、さきほどのことがある。これは、それに対する反発の表れかもしれない。まともにも反論するのでも、大人げないか。

「そう見えるのかねえ。あの子たち、学生でもなさそうだし、〇Jでもなさそうだし、どういふ人たちなんださうねえ。」

乗り場へは、一時間を十分ばかりオーバーして戻った。おやじさんから、「おまけしとき

ます」と言われて、ザックを受け取る。

「疲れたか？」

彼女は、無言でニコリと首を振った。

「じゃあ、お茶でも飲んでから、別れるとしようか？」

「はい。」

嵐山で、ぼくは登山用の名刺を渡し、彼女は住所、氏名、電話番号を言いたメネを渡し出した。

「九州へ来られるときは、電話か手紙で連絡して下さい。一緒に登るか、車でどこかい所へ案内します。但し、山登りも運動も、すごく上手ですから、その点は寛格しておいて下さいね。」

「ハツハツハツ、そのうちに、命かけて九州へ行くとするか。……歴史高へもう一度行ってみたいと思つているんだ。宮ノ浦川を通行したことがあるんだけど、その時は水田岳を通過して下山したから、宮ノ浦岳は未登というわけなんだ。九州登壇誌とか、日本百名山とやらにこだわらぬ気は全然ないんだけど、次は一般ルートからのんびりと、歴史高見物でもしながら、宮ノ浦岳に立つてみたいというところだ。」

「わたしはまだ一度も行ったことがないの。」

「へーえ？ それは意外だったなあ。」

「おかげで、今日は楽しい一日だった。ありがとう。」

「なるほど……、それもいいことだなあ。あの今西野司さんも、山登りを長続きさせるために、地元に来登の山を残しておくのがひとつのゴツクというようなことを、向かに書いてたなあ。じゃあ決まりだ。それにしよう。それなら99の残りを二つづけとけよ。あとわずかなだろう？」

「わたしも、とっても楽しかった。ありがとうございました。」

「はい。6月から7月までには出かけておきます。……時々手紙口していいですか？ 大丈夫ですか？」

「四角方面行きのバス停まで、彼女を見送つたのち、ぼくは登山杖を渡つて阪急の嵐山駅に向かった。

「勿論だ。変な心配はしなくていいよ。」

「橋の内には、今別れたばかりの彼女の顔い無影と、美人ではないが知れを感じさせる容貌と、セーターのおだやかな女のくくらみの笑顔……。そして九州での再会への期待があったからか、ぼくはその時、冬の夕暮れの川風に、寒さを感じるのを忘れてしまつていたようだ。」

「わかりました。」

再会(一)

「そんなことより……她は切るなよ。」

「おかげで、今日は楽しい一日だった。ありがとう。」

「なにぞ？」

「山から帰つた次の日曜日だ、ぼくは彼女に短い手紙を書いた。」

彼女も照れた顔つきで、髪を手をやった。志を出した時には、もう冬の日暮れがせまつていて、川に面した料理屋の赤いぼんぼりが灯がともされていた。

静かに単独行を楽しんだのちに、思いがけなく本当に山好きな人と出会えて、しかも前日までとは、まるでおもむきの異なる一日を送つて、大空御堂深い山行になったこと、早久島への山行、九州のドライブを楽しんだこと、していること、ほか、関西で登りたい山がほかにあるのなら、案内または情報提供を

「わたしはまた一度も行ったことがないの。」

「おまけしときます」と言われて、ザックを受け取る。

「疲れたか？」

彼女は、無言でニコリと首を振った。

「じゃあ、お茶でも飲んでから、別れるとしようか？」

「はい。」

嵐山で、ぼくは登山用の名刺を渡し、彼女は住所、氏名、電話番号を言いたメネを渡し出した。

「九州へ来られるときは、電話か手紙で連絡して下さい。一緒に登るか、車でどこかい所へ案内します。但し、山登りも運動も、すごく上手ですから、その点は寛格しておいて下さいね。」

「ハツハツハツ、そのうちに、命かけて九州へ行くとするか。……歴史高へもう一度行ってみたいと思つているんだ。宮ノ浦川を通行したことがあるんだけど、その時は水田岳を通過して下山したから、宮ノ浦岳は未登というわけなんだ。九州登壇誌とか、日本百名山とやらにこだわらぬ気は全然ないんだけど、次は一般ルートからのんびりと、歴史高見物でもしながら、宮ノ浦岳に立つてみたいというところだ。」

「わたしはまた一度も行ったことがないの。」

「おまけしときます」と言われて、ザックを受け取る。

「疲れたか？」

彼女は、無言でニコリと首を振った。

「じゃあ、お茶でも飲んでから、別れるとしようか？」

「はい。」

嵐山で、ぼくは登山用の名刺を渡し、彼女は住所、氏名、電話番号を言いたメネを渡し出した。

「九州へ来られるときは、電話か手紙で連絡して下さい。一緒に登るか、車でどこかい所へ案内します。但し、山登りも運動も、すごく上手ですから、その点は寛格しておいて下さいね。」

金剛山、葛城山、勝安館、水ノ山、扇ノ山、霧山、三振山、越前では大日ヶ岳、能登白山、冠山が未だで且つとくに関心があると書かれていた。

大峰山脈には、「大峰山」という名のピークは無いとぼくは思っていたし、深田久弥の『日本百名山』を通過したことなかったが、手元には置いてあるので、「大峰山」の項を読んでいた。同氏がどのピークに立って「大峰山」を登ったとし、書いたのかを確認するためであった。

深田久弥氏は、当時、泉州山岳会の幹西政一郎さんの案内で、新川から山上ヶ岳に登り、南へ縦走して弥山小屋に泊まり、翌朝に八経ヶ岳の頂上へ立った。

「一九二五米、近畿の最高地点である。空はよく晴れ、大峰山脈の諸峰をはっきりと望んだ。ここからさらに南へ縦走は延々と続くが、私はその最高峰を登らなことに満足して山を下った」という叙述で締めくくられている。

この記述から、深田氏にとっての「大峰山」の中心は、八経ヶ岳であると解してよいだろう。弥山の頂上に立ったとの直接的記述はないが、そして山上ヶ岳から縦走してきた場合は、弥山の頂上を通らずに八経ヶ岳に立ても

わけだが、仲西さんの案内ともあれば、弥山の頂上にも立ち寄られたことだろうと想像する。

深田氏は一面も無いが、関西の長老・仲西さんとは、こ目覚におじやまして、杯を兼ねながら談話させて頂いたこともあり、他の場所でも親しく声をかけて頂いた。また、多くの日本山岳会入会に際しての、推薦者の一人でもあった。推薦などと言うよりも、事実上は、入会費半のようなものだったが、だが、今やお二人とも、すでに故人となられたので、この点を直接お尋ねする術もない……。

ぼくは再び彼女に手紙を書いた。およそ次のような内容だった。

深田吉名山の「大峰山」は、八経ヶ岳に立てば、登ったことになると解する。しかし日本山岳会選定の三百名山の完登にもこだわりのならば、山上ヶ岳にも登らねばならない。八経ヶ岳、弥山、釈迦ヶ岳などの大峰山脈の諸峰は、男女を問わず自由に登ることが出来るが、山上ヶ岳は今なお女人禁制です。どうしても登りたいのなら、一月の後半から三月前半くらいに間に、テントをかついで酒川以外のルートから登るのが、そういう意味では無難でしょう。そこまでやる気があるのなら

ら、手紙つてもよろしいが。

その後何回か手紙のやりとりがあつて、四月下旬から五月下旬にかけて、彼女は八経ヶ岳、釈迦ヶ岳、大杉谷ヶ岳、藤原岳を目的として、京都へやってくるようになった。

ぼくにとっては、大阪を起点とするほうが便利なのだが、彼女が「大阪は、数えきれぬほど列車で通過したことがあるのですが、まだ一度も行ったことがないし、私にとっては文化も言葉も全く違う外国のようで怖い」と書いてきたので、「JRの京都駅で待ち合わせることになった。関西人としては、いささか情けない思いがしないでもなかったが、ぼく自身も大阪人を嫌っている一面があるので、わかるような気もした。

長崎発の寝台特急「あかつき」で、朝に新大阪に着き、すぐ乗り換えて京都に向かうというので、京都駅丸口を降り時の待ち合わせとした。ところが、ぼくはこの日、大根が凍刻をしてしまった。ぼくが京都駅に着いたのは、ナイト、11時過ぎだった。

実は、これには少しばかりワケがあつたのである。わが家のカミさんは山屋ではない。したがって、山小屋がどういうものであるか知らない。そういうカミさんに、若い女性

と二人だけで教泊の小屋泊まり山行をするなどの準備を、気持ちよく納得させるには、かなり多くの言葉を要すると、ぼくは説いた。それがめんどうなので、「単独行だ」と言つてあつたのである。

ところが——、その朝目が覚めると、雨が降つていた。カミさんは、「今日は行かないでしよう」ときた。例金担でもなく、単独行ならば、何も雨の降る中を、今日必ず山かける必要もないわけだ。——こうなったら、雨のやむのを、一旦待ち着いた嵐で待つしかない——というようなワケだった。やはりカミさんには、何事も下直に、「言つておくべきものではある。」

ぼくは地下鉄で京都駅へ行った。これは彼女の子供外だったようだ。彼女はJRの集札「二両手をついて、フォームのほうを見ていた。

ぼくはすくすく立って、ぼんのしばらくだが、彼女の様子を見ていた。そしてパッと両手をたたくと、おどろいて振り返り、びっくりと笑つた。

両手は、まず給びを言い、両手に電報を贈明した。

みたら、ガードマンだと思つたけど、今日から連休だと言つてたから、きつと来てくれると思つた」

「ぼんにとすまなかつたねエ。疲れただろう」

「疲れてない」

「彼女の言葉や態度は、その日は一段と粗密の度が増わっているように、ぼくは感じた。少なくとも、安心感や落ち着きを感じてゐるようには見えな。

家と電話したら悪いかな、とも思つたりしてたの……」

「かわいいことを言つてもんだなア、と思つた。今日はずいぶん時間だから、山へ入るのは無理だ。小屋まで行かない。食事でもしながら、どうするか考えよう。……何が食べた？」

「……わたしは中華がいい」

「長崎女だから、チヤンボンか」

「ピンポン。ビールで再会の乾杯もしたい」

「ハハハハ、じゃあ行つつか」

「うん」

彼女は相吐もなく、子供のよちな取え方をした。

喫茶店を出て、地下街を丸丸口の方へ少し戻ると、すぐ南向かいに中華料理店が見つかったので、店を飛ばすにそこへ入る。

「ナマがあるんだなあ。中ジョッキにしようか？」

「はい」

「アアは、それぞれ自分の好きな物を取らう」

「アアアア、つまみのこと」

「うーん、まあ、そういう味だ。何でも好きな物を注文すればいい。チヤンボンは、またあとで言えはいいいから」

せせらび

題字・小林琉璃三

私は前にもある愛読者でした。創刊号のあいさつの中で、「最近な関西の山を対象に」とあったから大いに期待したものです。あまり地味にこだわらぬつもりはありませんが、もう少し山間、山麓、山回り、山内から比較的近い事です。記事があつたらばと振り返つてみました。特に多摩さんの紀行文のシリーズは、2号から愛読してましたが10号から距離がありません。登山紀行は続いてますが、どうしたのでしょうか。編集の段階で、ボツになる原稿もあると聞きました。良いものは継続して下さい。又、あの多摩さんの文章、歴史を織り込んだ紀行がお目にかかれれば海賊版するつもりです。

(佐々木 久)

17月7日「初霧」の紀行に載っていた釜釜山系の古光山と後古光山に登りました。これで、今までの赤目四十八滝は始まり、大洞山、尼ヶ岳、御見山、桂塚山、三郎ヶ岳、額井岳、波瀾山、鳥見山、貝ヶ岳山、須賀山、釜釜山、三峰山、高見山、尾ヶ岳、尾ヶ岳、釜釜山、釜釜山系の主な山を登つたこととなります。特に、釜釜山系の山ばかりを登つて登つた訳ではないのですが、誰から空襲が眺められる火山特有の個性的な独立峰、日帯りコース、地形の起伏と変化の面白さなどが私の好みであったのでしよう。それぞれに思い出がありますが、ひとまず釜釜山の止はこれで打ち止めにして、また新たな山域に登る出発に

したいと思つています。

(吉田 信雄)

神楽バス、丁良線山口駅発の釜釜山行が最近停止となり釜釜山止めとなった。釜釜山から釜釜山までは京都三和町宮バスが運行しているが、日曜祝日運休停止となっているから、従来の路線バスを利用してこの方面の山へ向かう方は往戻してほしい。

釜釜山バス停も移っており、しかも神楽バスと三和町宮バスの連絡もすこぶる悪く、残念だが山へのアプローチとしては殆ど使えない状況にある。

バスダイヤのお問い合わせは左記へ。

神楽バス 釜釜山線
0795 (52) 1157
三和町宮バス
0773 (58) 3001
(釜釜山 釜釜山)
釜釜山行後の感想など、どしどしお寄せ下さい。ハガキでも結構です。

休憩屋・入浴も歓迎
10名以上マイクロボスで洗頭
種神石原温泉
湯 泉
〒250-06 神楽町釜釜山下
箱根町釜釜山 139
電話 0460-49041

四季降りなす美観 釜釜山のハイク
と高地・乗鞍岳へ 冬はスキー
けやき道りと味の酒・日曜連
温泉旅館 けやき山荘
〒390-15
長野県釜釜山安曇村乗鞍高原
電話 0263-9312555

さわやか宿
釜釜山 山吹の湯
釜釜山温泉(湯池)
湯田中温泉(湯池)
日 野 屋 旅館
〒381-04 長野県下高井郡
山ノ内町湯田中温泉温泉
電話 0269-3513578

標高2000m以上の温泉
湯の丸高嶺自然休養林
ハイキングにXCSキー
高 峰 温 泉
〒384
長野県小諸市高嶺温泉
電話 0267-2512000

山行計画

新ハイキングクラブ関西

このページの山行計画には、「会員に限る」と特記してあるほかは会員外の方でも参加できます。一人ずつ往復ハガキに記入例によって出発の7日前までに到着するよう係員へ申し込んで下さい。「費用」のほかに参加名簿代その他の資料代等を頂くことがあります。山行申し込み後参加できなくなるとは断りません。連絡して下さいます。体調が悪い方、幼児と赤ちゃんは急いで参加を断るべきです。例への参加者全員に旅行保険がかけられています。出発直前の関係に保険料(白紙50円)、夜行日帯りの場合は2日に100円)を支払って頂きます。(A-I/O保険会社と契約) 傷害保険料は次の通りです。

死亡・後遺障害保険金額 1000万円
入浴保険金 5000円
通院保険金 25000円

参加の対象は集合時から解散時まで。事故があつた場合は解散時までに届けて下さい。この保険に該当しないものは次の通りです。
①ヒッパル、6本爪以上のアイゼン・ザイル・ハンマー・ワカンを持参することを明記した山行、②スキー使用の山行、③沢・岩・水害等は自己責任で行う。④参加者間の事故、(詳細は後述)

(記入例)

(往復ハガキを使用)

山行き申込み書
山行
期日
住所
電話番号
氏名
会員番号 (会員でない方は会員外と記入)
生年月日
緊急時の連絡先

近信用ハガキの宛て名欄にご自分の住所氏名を記入してください。

地図読み山行

青羽山から高尾山(二股向き)

(新ハノ関西支店合同)

期日 3月6日(日)日曜日

集合 京阪京津線入谷駅南口時

コース 大谷駅→青羽山→ハノラ

→ハノラ→高尾山

→高尾山→三三院→高尾山

費用 約1000円

地図 2万5千11京都東南部

係員 ◎塚元一彦◎小笠原敏子

申込み T6101011 京都市西

京阪大枝北香月町1の5

の2の2 小笠原まで

定員20名「会員に限る」

コンパスの使ひ方や地図の読み

方を勉強しながら歩くシリーズの

第1回。登山の引き方や地図の

読み方の初歩を学びます。初心者

対象。シルバートレイルコンパスと地

図必須。雨天中止

京都北山歩き27

地蔵山から明礬寺(一階向き)

期日 3月13日(日)日曜日

集合 JR京浜東北線山崎駅のりば

8時10分

コース 京浜東北線八木駅→越前

山崎→地蔵山→神明寺

日本最高位の温泉

(2400m)

立山・室堂平

みくりが池温泉

連絡先

〒930 富山市五箇末広町

電話 0764-0434

ハイキングにノースキー

バス 熊の湯温泉

〒0269-3424

東京本社・東京駅前西口駅前3

0-5 室堂平温泉(2400m)

例スポーツサレ

電話 03-33341-0211

道の道 千両町

百八十七林「温泉」

ホテル

白馬ランシエ

〒399-93

長野県北安曇郡白馬村いわたけ

電話 0261-7214452

館内より日本カモシカ毎日20期

以上と、北アの登山雑誌、北ア全

体の大群衆の湯、春は山菜等

温泉、温泉、温泉

あるある、山、山、山

〒382 長野県上高井郡

高山村山田飯沼、東山田飯沼

電話 0262-2101-25527

（参加者）深谷正史 千葉千枝子
真田久子 平野敏子 前山三三
藤田敏子 竹田利夫 赤藤清美
今津宣司 中島義武 高橋孝吉
塚本正次 高比良英 飯田 昇
西田 夫 渡辺達郎 武吉基吉郎
仲秋一郎 柳秋雄子 栗田孝子
横井 徹 横井孝子 櫻井康一
菅沼賢勝 高橋 寛 松林立英
直根俊彦 塚本欣二 多田孝子
田中啓子 関定俊夫 中井ひろみ
平 孝子 柳居勇蔵 上井恵美子
下村哲二 下村啓子 ○山高野山
◎村田哲俊 (計39名)

巨名登山(三三山)
11月13日(日)・14日(月) 2回
13日(日) 雨 距離約9・30(集合
10・00(マイカー)・モーターなが
きわ11・00(集合) 12・10(ベル
ビル公園13・10(日名登山13・
30)40(ベルビル公園14・00
30(マイカー) 三葉高原ロッジ
15・30(合)
14日(月) 晴れ ロッジ7・30(林
道終点7・55)8・05(六岩9・
00)三三山9・20(50(ロッジ
11・20(集合) 13・50(マイカー)
距離約16・00(総所要)

雨の中、日名登山へ登った。ベ
ルビル公園でベルを鳴らした。ベ
ルロッジでは手作りのカモ鍋で盛り
上がった。三三山の眺望は雄大で、
二日間を共にし三三高原の秋を堪能
して帰路についた。
（参加者）稲本芳雄 深谷正史
布達清美 井上 保 山岸あき子
荒井 正 塚本忠次 広瀬きよ子
柴村純治 三木孝子 増田フミ子
谷口順久 西崎智雄 大宮敏枝子
松下和馬 余井 巳 木谷敏一
○村田哲俊 ◎須藤博 (計19名)

羽黒山
11月21日(日) 雨
開眼9・05 正法寺跡9・50(登
山口9・55(歩道山10・45(鷹野
台10・55(集合) 11・45(羽黒神
社)11・55(12・10(正法寺山荘跡
25)40(開道)13・05(13・20(一
関)13・40(総所要)
雨にも負けず、風にも負けず、
林の中の道の上、霧に閉ざされてき
りめし、それでもワイワイ楽しい
山行でした。
（参加者）三村清志 吉田敏也
藤田和洋 山本孝子 森 義彦子

多賀久子 大矢知正浩
別定保夫 辻原弘 辻原昌
山岸あき子 ○尾藤英五
○新井孝夫 ◎福原通夫 (計15名)

12月5日(日) 晴れ
標高約9・15(集合) 9・32(大
約台西2丁目9・40(赤瀬9・55
10・15(林道入り口10・40(45
11・30(集合) 12・40(成瀬橋通
下12・00(集合) 12・50(成瀬橋
13・10(成瀬山13・30(40(成瀬
寺14・00(20(山荘茶人茶14・40
14(成瀬山15・05(15・15(標
高約15・30(総所要)
おだやかな初冬の陽を浴びて織
走を楽しんだ。紅葉の大杉高層は
すでに冬の準備を終ろうとしてい
た。
（参加者）深谷正史 山崎清治
恒任正昭 宮原敏彦 森 義彦子
稲本芳雄 三村清志 ◎村田三
下村哲二 横井純治 藤田和洋
妹尾善行 尾藤英五 竹田利夫
原田孝英 原田孝子 京瀬きよ子
平敏孝子 真田久子 荒井 正
山本孝子 三木孝子 石田真由美

山本 都 宮原信子 千葉千枝子
大畑定雄 太田久子 松林立英
高橋 寛 中野英雄 中村道孝子
栗田孝子 新井孝夫 塚本忠次
木村利 柳崎清美 四ノ宮信子
山村吉枝 岡田 昇 藤田孝子
櫻井康一 林 孝男 山岸あき子
前田政雄 宮原敏彦 安田文英江
中西徳行 宮原敏彦 藤井たつこ
大矢知正浩 大矢知田哲子
○下村 操 ◎村田哲俊 (計57名)

12月12日(日) 晴れ
標高約10・00(集合) 9・38
標高約10・01(花山西塚古
墳・高塚正樹10・15(45(赤原寺
跡11・35(集合) 12・30(赤坂天
王山古墳13・15(45(石位寺14・
05(20(新開大橋14・40(朝倉
台古墳公園15・05(朝倉15・20
(集合)
汗ばむほどの寒気のもと、のん
びりコースで名残りの紅葉を堪能
した。石位寺の石仏はいつも美し
に微笑みでむかえてくれる。寒風
日射すより三三三三して後を

かけました。

（参加者）木谷哲也 久米敏之
高山 剛 橋本真介 森本琢磨
平山輝幸 平井伸和 竹中主税
桐野 量 早石信大 倉持吉紀
藤原康友 津嶋忠志 伊藤慶和香
和良清次 和良忠英 松永めぐみ
◎松永一 (計18名)

下村哲三 下村哲二 中家弘治
小島勝枝 松下 武 久藤あかり
山村善治 深田敏子 久保田英次
山村孝治 三木孝子 山崎加孝子
宮原孝雄 中島義武 内田清幸
日高英精 古田寛子 吉村時子
竹田利夫 原田孝子 小島フジ子
市川智子 松林立英 上井恵美子
宮原信子 西田 寛 安田文英江
近藤孝子 鈴木鳥子 広田正行
松田敏子 木村和志 中務加代子
武田悦子 田尻文昭 増田フミ子
竹内正三 柳田繁義 橋田とし子
◎奥比治美 ○山高野山
◎村田哲俊 (計68名)

新ハイキングクラブ開成
入会のすめ
このページの山行例会を通じて
正しに山歩きを、たのしい山歩
たると味わいましょ。リーダー
（急）はすべて無償の奉仕で、各
自で切符を買い茶代を払、雑沓
料もすべてワリカンです。
新ハイキングクラブ開成の活動
はまだ始まったばかりです。
あなたも新ハイキングクラブ開
成に入会してたのしいお仲間にな
りませんか。会費には無料。新ハ
イキング・別荘開成の山・庭園の
景をお届けします。会費はこの
ページの山行例会に参加できます。
入会金 500円(ハッパン代)
年会費 2500円(別途募集)
新ハイキングクラブ開成への入
会申し込みはこの雑誌に掲載の報
告用紙をご利用下さい。報告書か
ら送本せよと明示されています。
西 定期購読を希望される方
も会員になって頂きますので、報告
書裏にお名前と住所を記入して、送料
でお送りください。

安田 実 宇田博代 梅田スミ子
森野誠一 寺田健作 松田信敬
大矢知正浩 大矢知田哲子
西村正規 池 知清 池 れい子
上杉 上 川人啓子 家原樹夫
古屋 敏 水野清子 内田八重子
藤田 進 東 直英夫 中村美智子
村上祥一 藤田孝子 水谷八重子
松村 亨 坂井孝子 磯部孝子
渡辺俊二 古武洋一 宮原敏彦子
小崎俊子 坂井 実 島川明代
辻村延夫 藤井 正 増田フミ子
森 政和 吉田和生 谷 光雄
山田賢治 田中俊治 杉江佳尚
杉江孝子 大塚光高 杉村孝男
松田敏子 藤原健一 藤 成
吉田孝雄 原田重徳 伊藤敏二
原田孝子 三山重夫 庄司孝一
原田孝子 村上新一 小川吉太郎
幸井信夫 幸井正江 小宮敏雄
鎌田忠孝 大阪府社会体育研究所
下村三男 吉田公治 岡本佳子
富田潤子 加納孝彦 岡崎 正
藤原敏彦 吉田忠徳 森 高郎
中谷和子 高橋 寛 高橋信子
山口若夫 藤本知一 藤原敏彦
久泉信子 田中 誠 田中真英江
前田孝子 中西徳治 竹田哲郎
竹田孝枝 須川正徳 鶴見和子

